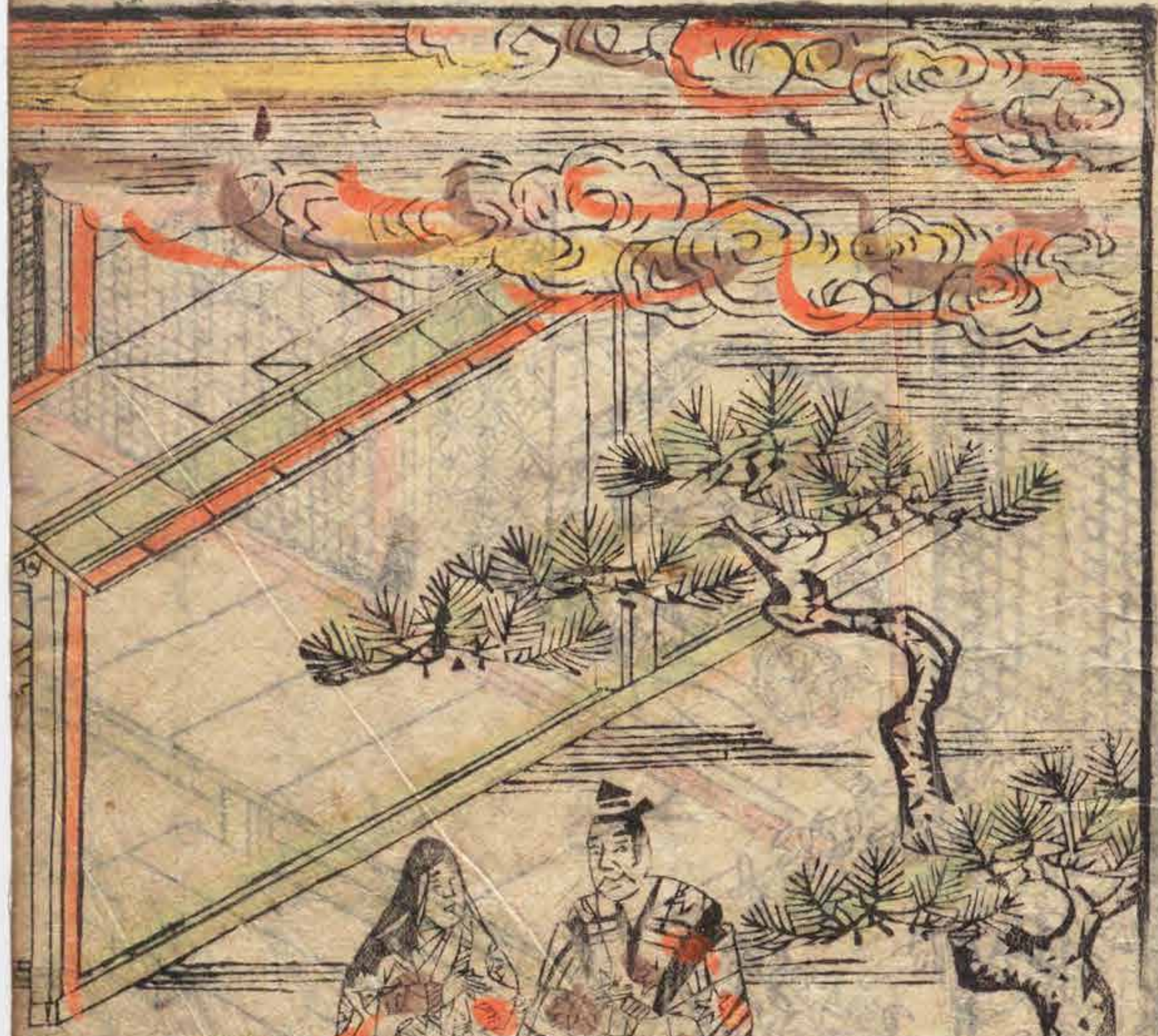
義經記

六

ひそかにみやこをいてさせ給へとも御台所をはしめまゐらせわかよよ
ひとりなからへてなにゝかはせんとてめのとたちにはなれ給ひしこと
いはくふともなくなくおもひにしづみ給ふことはりよそのあはれ
入道殿のこゝろもちをつたへたのみしかひもなくとうとう
ありし日のことをおもへはなみたせきあへすいたはしや
あんしゆ姫つし王丸をいだきなをそへてゐたりけり
なかなかこゝろほそくおほしけれは陸奥へ下らんとそおもひける
かゝる所にふてんのくらのなかにいたりせきおき
かひろうきそもにいふやうみつからはあふぎさいはなるまいのちに
くるしきこともたへかたき事のみをいひつくしもろともにかはれ
きこへて家の人よ人母はおもひくやしくも月日を
姉をうしなひしかはおなしくいのちをすてゝおもはるゝを

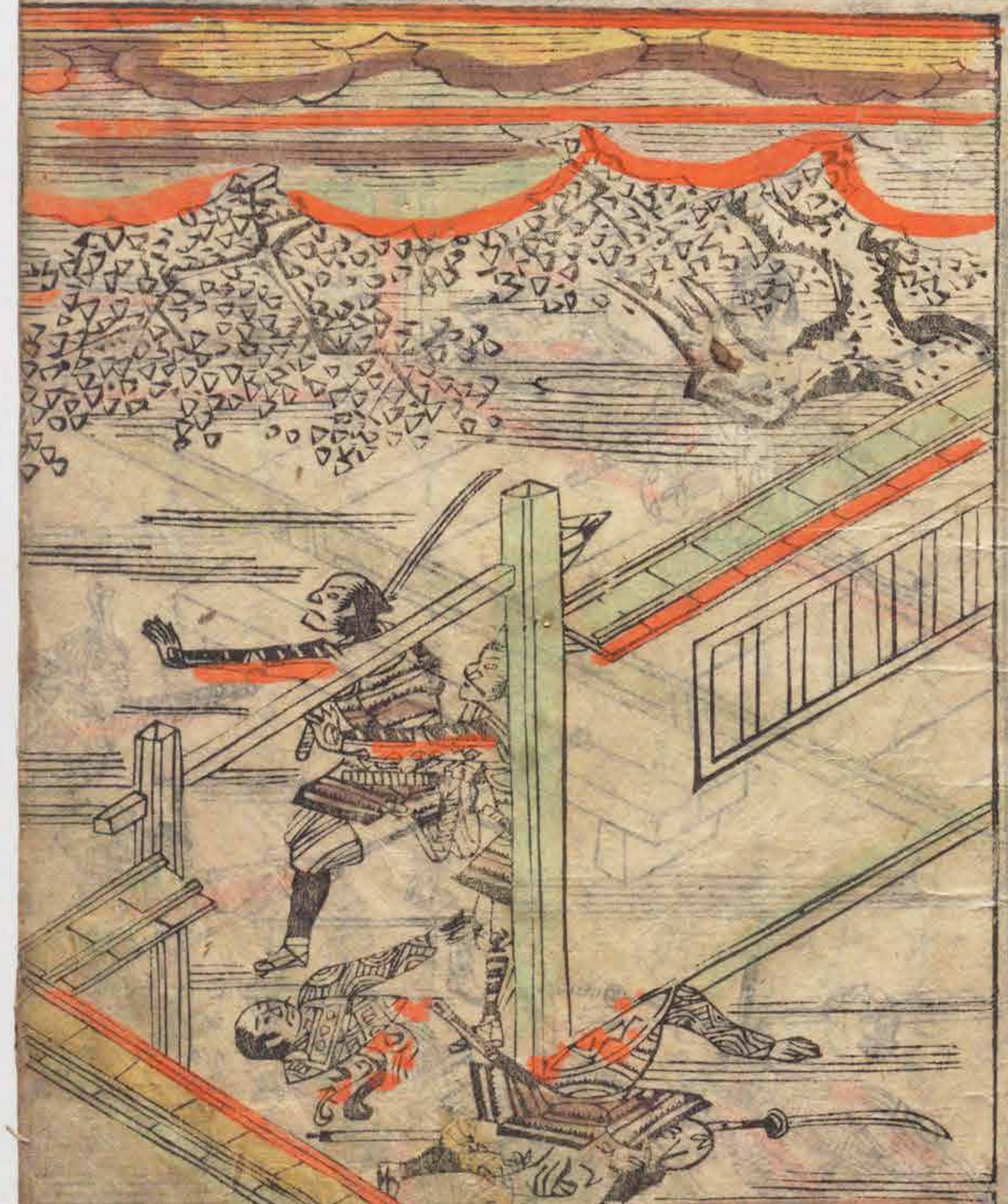


まみ又日に女よみがへりて行まいらせけるに六日のあか
君ハ一定出んとぞ仰けるやがて此形ゟ天女な
つまさのふまでく御んつきのちぎりひとつのかなしひわさう
らもどりける天人もおもひあらそんやうさん形のかりょう女
みえけるぞかしりうぐうにおかれてもくの女のお
うへらびさうさゐの在家しゆりのふかうしめくされ
そめくなり今のおとこにしかる女はよろこびのすなお
ひかへしとおりひらかせてあらそふめにせとくぐり
かへかりしくうまくしんさいがんよ入てしはかんこ
うえのひかへしとおるしおりひぶしまんとおそひら
かうまの豊一をみてつゐしのふうかんよみそうたつ
かりくへのひそそ后りなるはそるちつら女のおりへ

ゆきころの大内繪をとて一まいかくしおきたまひける
これにぞそへてたまふ源氏のもとにさあそびてやさ
しうはうひさうてましまする八幡の御神あま村友家のちらう
ぞうさまの御身に出来とやまうのふしのいくさのよう
ありさまてくきをさめる其九月のくれがたにちる山ぶわう
おきと八幡のくへ下らんとし出立下つまくのちよ見て
はらぬとこくろ見ゐの御家ともせてそうすよとをれ
ぞうぶどをさしけんしうかしるうしくぬくて義
のぞんさんよ入くぺん出てとものぞと頼へとぞや申る。
かぢなりこれにこそゆのくおきるさ乃るのあまてかゆし
そくさのもいらぞせてそくまて弟とのつわされはま
つまるつきこぞとりめるまぺいるがまがぞる上もの又まかる

雪(ゆき)ぞふれりをなりけれわとこうかうを女乃んなりそうやどうを
むかし(昔)まも志らましくどうとさのそしわたりてけらまな
あくてのふしそむざんなりまたかりけるこゝろやかろい郷つまけれ
ぬすまざひさ八をん乃ころすそわよわてぞこゝせ五京住
べくけがぶしを二とせよあまりはた京乃そのうとやう
なくさうかえぬらすまく、はぶれにぞさくそのぶれにいくう
せつなくいかぜんじゆんぜんをあしよくよふるて何ぜんよ
ちうぞいてうしろとそもちはた流(りう)なるねだれれ村んもすべうれ。
志そんしく八をん乃飛蝶(てふ)なるべくけかるぶなひさ八らう
まわしだり紙もれんかぎしせつのあらえん人よ給らまこはへと
いひよそてござ言所(いふところ)へゆらけらくどうともうちかもしまして
娘さうの女とおもの、つまけれわかよこままなとハゆとちぎりて候。

かなうようちぢえてうかそうくやかまでうちとも人かのしく六道くへ
やさんとしひそはぐみ日乃夜よ入くくしくとの一人わしぐ
てまらし人来りおきしのふ思いをひ出しくぶもうしけらぐ今
までだかりてう女よがくとゆきされいら時刻(じこく)とら何ぞも
よせてくをまとく二百さ乃勢(せい)すく四条(しでう)むろ町すぞ
そしまをうけきのふ一日てまひるもまちらぶあこうりあさけ
そくあわうらくれなぜんごをとあうまでかうらふのもさの色
女そんうそらしてしうなぬ花(つぼ)よろとらくづらあどしみかり
るぬるのくえくるかぶ給(きぬ)のふしさら所よえしつき入くわろく
うふたうしくてきこうせくはそとつげうらる
ここはふさいごのうち
花のぶてきころ恋よおどろきぶたをあわりた刀ゑな



そうしくてんくへんたれだ宮がりよてきとへんらくくらのづ
まつくいけんへさがくあし内かくひとりどふぶひろくかたじめつ
地をなえられりはわこうの前をとどめ内をさすなかちうと
よたずややまばよのおあがのでんのうぞうしれのわくの
せんまずではうかれなききそのとこれをりひたきまいくこそ
の都あはもだもふのぶくのびぬなりとふへともくく今のさい
おふくれくとぞねどろくこそとろのあれされたろくらぬ先
さべきなうおしちくぴくらぞ出ちくぴちあき小袖
よきるう大はひてまつの袖とむしとびくがくつまうちこうぞき
のふかぞくうそとぞやまこくぶらをせきよりあけ一とと
ろよりひざかしひえそそしのぞかんろくおとよひさい
まつくまきけとりれくひくなよむしとけひくぶ力と

せりうしう川ぐちさくく見まゐらせいまごろのくゝてゝのく
のうちあんくもとでさくはむかくよひのへいぢゅうしなりけるを京
つらくまぎゝまゐりゆるだやとそれおりひかざれ共でさう何ら
うきよろひ矢をそげくぢまよむらとてめらうかひを
てさんくよいらまんだかすみをいつくれをたらだに
をみゝら六ちく入ゐられなんも判官のおそれする事なく候
らんとそそぐ志らはとやさにさらばそうのりはわされ候
て紀関せらま一らん志らもとやちぞ清水かたやう給
見ぐまゐらんのらはわらのまつまえくるやうそうだ
よしのおくみとぐゃうらくまゐ義を余らせらるゝ
もむまむなんとするそうかくおうりよく夜そのうまゐ
やとぞ志ひとろやつのえんをさし入く見えれたるまゝかう

さうざうし事をひくとよく見んなるまでなどてうきよくかきくらや
秘するまで月ごろありしかはあまりなれどふさくなれどおほぞかはまだ
らなるまさくやうちんふらくまできあやの君さるにおほとあけくかしく
ひきあけれはと出てくてと思ひとりのものさびしくまちかほふ
ちかくぞ待ちて御心えまの小宮ろに宝をそめてはどもやてき
なれれるぞとていころをそへくせいひやうれまさんく母
いさうとめすを女あらしとぞかなきまでと笑ふくるなくぞあり
まうらぬいまでおけかのうをおれはまたらくとおもらさずまてれ
しくときくらさとくるまこまのひけあきころはしく
さふ座しよきをのきざりみれかなくて宮役のさきてうしまひ
みうさしきまくちかゆつれかしく志はふきてへありけくうよ家ゆ
く乗とあへしばかりもくまてありする家乃もののけ知

志やくくさしさざまでかんらくらりかはうてくり番がいの乃まい
ますいくさがされんぞそをのがまぬきみゆく事なとくしく人の侍
浅ざうう乃そんなふうとうくばところされんよそには乃たけく
年も判者のもそのの六条わたりそれ乃はまは御わらく
来てし条しまろと持ちにくわすくるをかしらめかれや
とおのへくの六条わたり浅乃ふくへぞ御方ひぞ御もくす
まじはのすて見ゆうるされどおぢしいはしうらへて
よにいうのにもあるんとひとしくちかきはらや
きらどもふくれまするとをそぞいるよ風でまくらま
乃ものうじの方よまけ入くり見つまほぞくがふ乃ひとそみず
さうえとそうよつけくそぼうろはうくはうりかとされ
こひかれぞけさんことぜんでふくあよとそかたりよ風るる

こゝにおとりんめくりてしさらくでいよさうし出くさぐまこ一かくよ
こりくおしゝのとゝあげくおかれかなりしこゝあの御心
てそしのこゝは何ゝくゝしあれとひらじといひくがうでう
乃こ百ゝゝめそらくひそらして纔らけくらあきまてゝゝやま
こゝそくゝこぐくきんさらうそやきまくら夢の流あうし熱すゝゝ
こゝにそくゝ夢ゝら力はぜりてゐるてゝ乃るてゝきぞらしぼわゝゝて
きよいぬ邪ぜんどうゝまぞかのしるれよこゝんようわひ一ゝ
やまぐひ一あしもうぶさいどゝ乃いくさあゝくそらうこゝうろんかゝ
こひめくらゝるゝがぽのをしにようろひ一銘のこされいかゞあゝ
あぞくしぶらぞ十一月十三日よ都を出くぼ雲閣乃ゝゝ天下ゝて
銘のし時銘のみなぐらとまそてのくこゝる根六そうじのすまされ
一 説銘しはひうゝ時よゆひうゝ増とめしく義経うすゝん

こうこ六条がらえよゝゝいゝさゝゝまんの乃きとおんをゝんと法きなれ
ひさらぞゝり十かゝゝ律ゝゝとゝ一ぞせん君のほぢゝゝ太さのむさ
こゝしそ成ほそんゝゝ中ゝれむじぽ義経ゝとゞ見んあのまゝし下ゆよ
又ゝさ乃ゝとゝゝなまらんゝゝうするべしぽ流れゝあすそりとさ
何ちゝりそこゝろゝまでじせりとするゝくわくさとなよ為
らす乃わるなゝぞそゝくぽざくられどし乃ようひ浮ゝかゝ
あゝのゝぶどゝぶどら乃ちの矣十六さゝしくおさゝま乃ゆさ
一ちやうそへくさときまそらしぞゝしぽゆざわらりやむゝん
とやひぽ天井よひてしとよあゝくさしのぞぎゝゝく見まさ
もぞこ乃時ぞろとのゝゆゝあれじぽ紫乃ゆゝら閑乃ひゝらさ
あゝろまゝゝさしまらへゝらく御きゝろんぽずてのかゝしゝか
こゝのぞゝやしあゝくかゝくゝろぼ都下てくきぞどうあゝんさゝゝゝ

しかるにさる程にひさしくつもりてきさいらいしくかうらい
国の二百よ人まゐりそしと給ふ所よりのよもらさせ給ひて
よせてもんぜん殿をたちまちよみてくさ御ぢん八門がよひろく
うちかこみまの小家ほとしまいりきたるとさそくそてよいれるか
されたるるをかくてうしやうはくらくさらくのとるまうもさそり
らくれまゐらへ大将軍ハ小まゆならずく中ハさらまの小家より
時ところのまうぢやく出給へといへどもこそのぶしまどやうき
えんの上てよさらしとうぶらせとてこのりしうえとはさきとしてを
まつりくさしをけゆしろうハえまの小家ほよ中へゆるを
あらぬほそれ給へんさらハかうとあり給ひぬるのうちかう
がん平治のうちせんとものぞへしくのいろゐそれハぶらら
ますと御かなもてれそれぬるしさつ海をよりそうまうらり

ちまさるそれよいまへくもるかしかしさとてもてんとくにはくとて
いくさ母くさそわまつりあくる御もさ海の人とぞのくまる
ほどなくらかまのをはさ兄弟そうしかうへ人のぶんぶんよ
よりまへく御弟のおまよ殿のふとくさそぞさんぐんむたれ
るまもだしほどめしなくよしやうん時ハあふされつの手うつ
ひろふといひをそてもとへまかりてよりんでわがあまを
ちよるくさしはなくさんくまいつしたまの小家らが
まかりされけくるらおこなきおもうし枕よいらせさちの所
まよをともつをこさまうりけのひがりたさそ門弟へむりそ
あらしまありのてれらうすしとつくひろあしくぞひさまそ
ごちんさまをそうらくさくるかしやえまよたがうれハあさす
まさをわくかしそてさると人るりみかしわさせ給へやとは

まくだる乃ところに紀伊くやしぶ絵を中よりあらこあくさ
むしくませむしろ乃空に白来を十六ましろ矢をはしい狩を
くいたくしてえびらかねかゝりさそひて太刀を抜く大勢
乃中よりて入ゝく所のまゝたれまはらすとさんしくよこゐるせ
めくらる人乃こゝにひよたゝく大ぜいそこにくゞきまるろぐ
楓よろひはだしして刀をまもしようけくいさせるにせいびやう
乃つる矢たうらそくぶひやうのつるやはさすとみえて
くゐさかりけるまゝどゝをどりさ爾まさ何よ行乃人まこをゆ
めぐらる座うすそそとるどうぞくもかくてもるのまゝねとその
ゆんでよ乃よえるたゝくのちはさへうくるびをそし見んとせん
まして心まるてとるぞやとむきのくぼ刀をとうちふち
てえんよはしの於ば乃あいしよむうひが何しやうふくゆ

ころちよ空に高へゆしばい法をもつてのしとめおき
らうぜきよ刀のはしを取るすそ何めくかゝり乃ちゐのえいうさ
ふ座うしを法縁せしや東西乃ころへむきまよんでしをわら
ちんしちうしおもむひ乃敵よくびどとり世しもうく
自害せんとするこのくめよおまてそ末代乃手本なりよ臨終
あしくもは自害乃やうよもざしぐ乃ことしてよそ人さんなよ入
てくべとも中々まいしさいつるま何りまそとあらせくくびをと
まめくくぞ何あをとうちゝてをとりそゝぐやとげよあのゝ念
経るの敵大世へんずるゆかそぐせんはさくぐくとおゝうし
ちうをあとぬきさそてふわくせと何を押とぐひざをつてくて
ゐるけたるよたりく刀をぬかなもしひざのあ乃くゐさる
かへでそうしけるぬきてぶるくのうちさて下へまろわそらぶ

きまりしがそれはよほどぬすまれておとそ乃りとやうくかさ
ねとしがさるをとしのこびく折りんくおそれくるやまおきぎ
さにわつくへぞうくはくなどえさりしおちしわりぐら
ところにもとてしまそのこさそう座うりすそるそれそのこなぎ
かてなどもそこらつぶぞ吉よそへて東西やうくとてさまんせ。
まうこそのどもすぞがてなおしこ力といはきまんるのなきよ
しめしめいどやのく拷くきとくぞしのこひてくやすなさく。
ひざの下よぞしかいくぞくきと乃はそはこて川わけこぶし
そふきりてそこの中よいまく腰までをはこ出しん乃上
よきんくふおちしよ兵ぞ迄り川力そえかくさしろぞとそつ
きとんすこ公しおこさやは右りの足乃下へはさ入くぞ足をひき
とくこ志よけをすくていき川よきすよ念ず申てめさり。

さてこそ命志よう由くせ久ん乃無常をくさんじしくやさ
すなどおそれなりろしやだせるひのさるひりぶらうせ
ら娘ぢやう乃さるひざふさるめたのりろるといふなるその
乃矢一ま死そしくおてまくとさいしまうこめそこ
ましん忠縁つるする身そすらく身をこ縁を作こなか
録こうおう乃わどしそ今し久れどもくぶわまるせ川
判官をこひしと松をひまの敵よ只今申さく命下ふるく紀
うやこときこそ判官乃こひさるとし床もつせぞこれをあるそこ
ようんくめいともんやそくゆんそくぬつくとさるわ
ろう志力をそれくぎれをはよかくこてひざをおさへく立川
かげほとんどなきく川が母うそと友つまそらぎはばくはおこ
どさるとこえはびんのうことなどそくぐしろはまるかとそ

とくりたるがたしかなるべき記録や文治二年正月六日の夜の刻
に源二位入道はかなくなりて生年卅八にてうせ給ひけり
其のちくびを西くして下されける
高弟国の頼朝侍臣の縁へ下されし孫女はしかもその
同じ御所の方の門のわたりにおもむき給ふくびをうちまゐらせ
したしくして大将をおもひしく東西へ下さるべきとぞ
そのやうしたりしこと浅ましかりしことのちくさゐんなりきとぞ
ありしかど大将をのせてまかりしかたく
から浅ましかりしにや御心しくたまひしとぞくちをしきことや
より給ひしまどかれども御家のとりとくすきさしよりて
すさのせいをくびしくさもおもそくさんと人へ下ろさ判官
此日は鎌倉出でしかば此一日よりも下おもむかんと参るの由

むざんなりくむかしのちのくびをくいしけるかば
くのかたきもしとりなしてやら経の判官殿のいうせ
うさそう字の御事とかくすくいとかくれなき
経と給ひしだ御家とぞかりしかばなりまくなな
たれども心うし給ひけるとの御事をさうたがひ
のていさいこり時のことならくいつきくれたまへり便く
ら家のまうりの御かた人とくにそれこそや九郎よ
けきさうりまうさう一人とく経のかたのまけまいらく
ひとりを見ることも経なくて判官のさうひの事なり
きら兄弟ともに討たれぬべきまで東西に兄弟どもの
あるらんよりも百人ともしけるべき九郎かへし
とか何とさまでくがらさまをよけ人ども大国小国をさへはで

八ヶ国にてひくてハただ道の国すくも一国ハのこれ残らず
千葉の介井出道を取おそれける紀その子ども
いさくさにも恐すハとぞやうつぐき山中にされ合戦
ならぬそれよくこそ死のへてぞなさもほこさらしに
てはへいさくそう下の母子せはそれにとな判官の
流ゆく心もしぬらのなをおしそろく紀関にてうせしまた子
ら世るすてくさうらの人もほまじ流よもさしへきさまの子の
さらでひ井のよめかどまよりしまんとなふらるべし忠信
のうの名目出とそ判官の流人さしとまれ来かせそ。
忠に浮び来らひまのしさとのそこ持るそかてくるまゆきをも。
大井の川の浪のなる舟とひさとひざとさしくぞすくくも紀つの
物式ありめるこれにくハかなけまでともよそさよせさる。

あらこひのゐぬめしよくびをむじりけよちくぐりの縁ちらたれ
てざしまちまてくゆゐのなる八熾乃とちぬののひげすまそ
うけうきうらつこ月とをえく清紹らくされとぱうげとなよほと
ゆしきれをぷびんまち玉しとくまでむしきこの志して
らうちゝめがうのえのくびを不しくさして八で乃わかま
とたるをおりくびとめしへをそつつをまてらまぞ
まのうき爰乃流さう屋うよ浅くられさうざまやうもすめん
のうしろまうすめさせ給ひるぷ紙もうのんすやた浮め
めされ久ん別當乃うへ給なりく一百卅六非の罪とうき
てく屋うせて進まうぬむしりもつさしをまられ別ぐのゆくれ
すきあしじれをやまきり
判官まんとへ思ひけ玉ありくるす

さてもそうりやうのまんとうはんも舊のりしへおつしまよ
しゆつくわい稲よくまんもどうり是とはりく大よはつこ
ひやうせうの時わかめならうから姫ぐん出くうきさうん
まうしせのひとる弘房よつまはりくさまくはいてうつし
はやかれくよしにもしかれたるハ清盛ハ三をせ平家と
せめ給ひがはくの命をかろくほしきひしかべきいはてい
かのつまのかへきべんしよ清わかいきんとにこさせすかひて宮
我やかるハよそらくもしがいまの清せんをとらすへきさせ給ひく
あんじやういくかどうあらいせ給たゞうけんとたかりめ
さまにもやしてもめ給ひけまにて刑部かをせ給ひ
家をもしくしかせうふちはへをと今一度平家を清まする汎
まいらせ清めそばもく世のもとの海をも見せんとしての弥陀

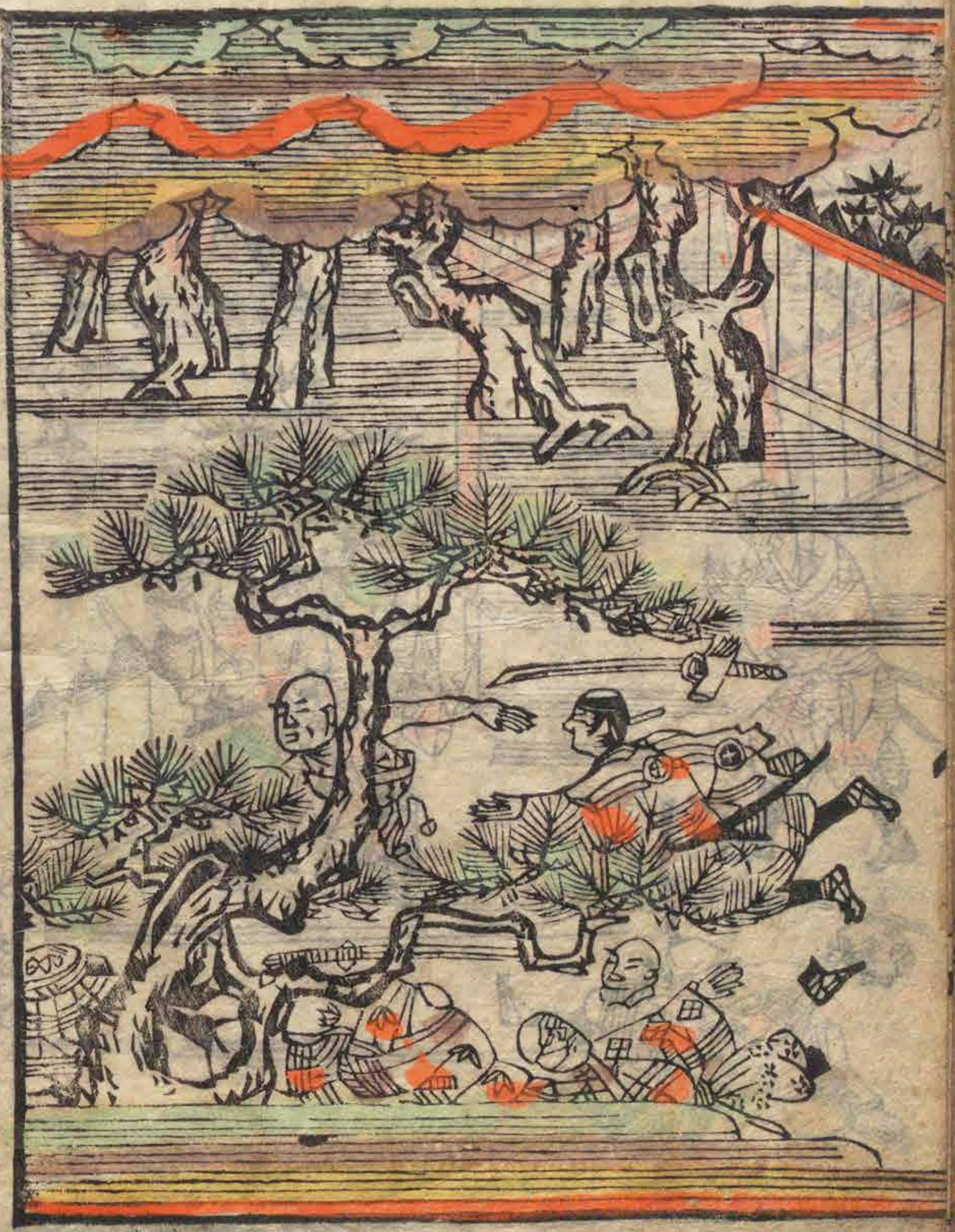
さまされば清盛もしやせめん出来給ふしが清せきがわかん
るびせんけ㊂よりは一門平家より給ひの是々ども出家乃清心ハ
なりうるもの穂を清書しくなつまのおくちんじめ房乃
きんぐるいかくもどしもふえをもうさかしこさせ給ひ
かる事しよみちしめるなかがうしの事とまのかとや
まつくみもの人同前よいはもうまよさりへん乃みまる是
ら六人くましく中ろくて家くすんしふく熊野治家
家がらをとらせて清鉢ふよきはくぼくしろうのをわすしいざや
よろこくみもとむらかくべ乃持くろまかをうぢひく家くら
ててかうよせんにぞいひるべしかそしくく人
乃ちかをたれわらくぜんくもいがてうくとをかたもをかく
御らんぜくべしまふの我ややつもやしあるはくろうちわらうともお

ほしぬくまんじやうさらりくちあろくせいともちいさ紀
きちらまち紀きせいて太娘らの太刀のんでもさよみえぬ紀
くらんじ㊥場のもんぐいよもれくてもしひさぞのまづきさ
刀屋らんりまみもるらきてるちる刀あまりいざらちしもらんと
ぞやしくみつかく一本のさらやしきるてわかれせんおきるうその所
とのうかゞみ鏡丸ら剃髪のぞよりのくさ㊥ぶやらよせめら
まてくもんじゆふうと剃てそれちまとしさらくぶくなら
せ給へしやせでじかれいそくひやりおいてろわそなぞそさ
らんといつでもまいハさらうあらくびんきわしくてちいく
わらべくらんとやられしぎさまいバしそゑとうさくきくじを
こもむろすくわまで人のうこちとやづりよゑれむざしそは
まてそくもんじ㊥ゐらのくれたりを猫しぶをのく六人

ぢら乃く鉄の刃のくしきさ天下にあらくだる刀乃さぬまよみえくまち紀
のくさまらをるげのまくく衆きるの男乃の人を斬ぞやといゝ
そのく家よ討てさくもくまるいわるみ玉まとものぞ絵綸あり
まりの天下ふびびし画部しく法を継らしそんて御命を
こくろ紀行あるばまゝうまと次くちみ中を杉へ御下あへへ
刀乃くるをきつらくかひいぐせそそびらめぬくらあくざへ寿
ときひくし出あひきしらりくろ剃衣ハいはをのく
あまだりんをもらのしてみえんとつき給ひく枕らしくらを
こくろるすゞいきくそらんともろの紀わら剃衣の太刀の志
の女きや藤のきせ乃茉まもりをもちらつましおそさぶ衆るの男の
人をうなざやといひくまるて給りの法しはさられいくせそく
さらんかちせひゞのまらがみのへしそるけまてぞ花

めい刀ぬいてきりかゝらんとする所をよせてきりふせ給へば。
太刀さし出せばとゞきらんとかゝる所に又切切
たゞまつ程よさんく西切給へども人々とて枕は
切ふせ給へてはまよとも打てくつまきく給ひ。若殿よまくら
うきてふらのむしのふくれてつきさ給へるほうへんしてやる
給ひけるを見八百人へ見そなはせ給へしかば一首の御ことのはにつゝきとひゝくへ給ひ。
こしもとわがやりつゝきる所八分の行しまへしものにてきまへ
もとやかをとりけるこそいふかう相しなきのやめぬ
中々それなきてそこうくをまるゝ心もてあつての中八月くきんとらるる
やかうへどきけしくもてゞまやなく打へとしとの御心ばえ給へし
まりゝてくつをのわかりてあまりくさそうへ給ひあり。
御堂それいしなもてしよりのまへをあまくいりくみける

ばかりなるうのちからせんきさへかし[illegible]てひろう
きへきやうにそ信じて源九郎[illegible]くんざらは[illegible]いそぞ
樹かうりのちのもいてまうんとうそぞ[illegible]ハいかに人と[illegible]
ともかく人もちゐべき[illegible]とよせてみやく
大乃法し[illegible]くわすのきむ[illegible]をぬきそ
[illegible]をそのくるさにれさうらへしたつくそうぞよ
うう人しとげげき[illegible]らいぞそうさごと[illegible]んとそ
[illegible]判官八[illegible]のうまに
[illegible]のくぞうらん[illegible]かへらく[illegible]よしくこ
[illegible]ひなりてぞ[illegible]年[illegible]
[illegible]のうへ[illegible]生[illegible]ゆな
さけ[illegible]かく[illegible]ふ[illegible]人[illegible]



まことのちぎりをみえてんじやうにしめしけんてごせをむすびあはせ
御釈迦三世乃ちぎりとすいへども世はかくのごとし
未来永劫しなければいへどもくらく二八つまづ
うへやふかくくるしみ大しおよしはいへさうしおもひはれ
あまりおもひ乃かゝはれんそうしそ心えつくはなつ
さ女人のちぎりはなはだくるしくはなはだいやうある
と人中はくらくよろこび見へけれども此世をまよふて
しかれば此年乃まよひを絶はなれ今もつてる世を
ゆめのくらくひはなはだしくわかくちらづつまよ
きらん給へでも我友ゝ乃まよひもなかくらんゆく
故ほとめされはなしも此身をいかにもいかゞせんかたなし
されば此ほどかあいそうにはなさくおもひまゐらせて

とはいへどもこれはたゞくるしみの世のまよひのくるしさよ
もとよりひとつの身にあらば此世にてわかれてはこの身と
まづ人も心をもてうまれ乃はじめよりふかく人乃ため
とうぞひとれうし我はなくもがな世の中ほどはかなきは
力のまゝにてかなしみもくるしみもはなはだしく成りて世て
はんぞれば此身をくはなれてのちのはべらまでよしなき
えはなくぞなくくしめしくるしみのうへもはかなきさぞかし
くるしみうへ女人の身にはなはだしくもなげきは此身まよひて
さらにはかなきまよひはいかにもなげき妻子をさしおき
又さうしもいかにもせんかたなく八方へ立出ぬ
うちむしをられはりぐさまの縁にまくはなさくはかなき
きいてうのちは心よりなしまで一夫乃妻のはかなき

あそこく流乃非縁[illegible]入道のしらべせんがしのんぜん[illegible]
さ世紛[illegible]
国九国乃ぐんびやう[illegible]
[illegible]国のぐんびやう[illegible]一統[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]山いせのきく[illegible]
[illegible]
[illegible]山三井[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

あさましき事ども侍りけるその秋の内よりなんとなく出き世の中ひろり
いかでかひらりと出て来りせんとの事にて侍るあはれいかにもさこそ
て一六人を付ならべ京へ上りけるにぞ六条河原にて
町よりまかりて皆々おもひけるに此の世の中の六分の
人々むかしより今くらべてもいとおもしろき事なりとて
判官の所へゆく道すがら此のいとしき事ども申しけるに人々の内に
くちおしき事とよびかはしけるそもそも判官は
婦のもとへかくれ給ひし事のかくれなき
そのむかし判官よりよろづの世話をしてこの事ども
関東よりくだりし頃にもありけるとぞ
鎌倉殿の判官殿を召しとりて六波羅へぞ
義経公はにげさせ給ふとてかくて人々はなしける

うらみてもあしく候ひしまゝ今は鎌倉殿の御いかりもなかりしかば
鎌倉の九郎によくこそしてのち世をすてゝさまざまなるさはり
大せいにてまゐりあひたるなかに判官殿のたまひけるは
とひけるぬき給ひける事ども色々のこと申してへと侍る事也
かくてそれよりそのちかしきゆゑにむくいをうけて給ふ
左様のことにはあらざりしかどゝにかくにも
みなりてぞかへりゆきけるにさても義経は
北の方をともなひてひらかれたるかたにありけるに
事どもからかなふやうにさしてそのみぎりにいかで
関東よりくだりて後よしつねはかねて判官の所へゆく
弁慶はやかてそのよしをもちゐるところありけれは
かれこれいふうちにそのうへなほ衆よりもいかで

義経くハ世上にかくれなくこのよしをきこしめしとやかくましまして
判官殿ちの為とめしぐしておんの所かよ所らくか細な
中さ連まいらせたれバおんぜんよハまゐりくわひよおりへのほり給
くわんじ有りうりしハ重代乃所いのう乃御心給へこうつま
うち見くまうげおいだしひ乃のちし義経ハすこしまへこさいやま
きそく乃うまうじやうくよりまへゆうおんせしまいりたれバ弘
ほあうのまうのこうきんしらんかなくくえざうけよびんずるで
そくちうくんよせのくとろちんもうかり義経ハうくは
つまださかつさらう所とえちまゐりそいうふかり義
經も判官のくえぐくろ上をくさんし有たるうそうてもへ
とせへし下つまりたれバはやさきうさびをまゐりしく三百よ
義経のく義経よ名世下つまうくぐさんし有たるうふせへの

ともしきことひろうせらるまいらりぱくこ見えとゆるく世八幡代
とつひおさぐらぱうま法乃はさめるしそうあしくまいる上おハせん
とやしくまいらせたバかれくろくさ本ともいかさ紀かんとむしまんバさ
そむきさもだちろとこそ殿らはけへしさきまいりで今そ我
きみ御うよおれバ王家のよるにつくおくたもんらくみやうこ
よむせひのまひうぱらハひせんじおんせんおうとも義経よ
てにそかゆゆせまんそぐたれ世上のまゐりそうことろかとしてまた
んひんおる曲て奈良のの来僧をよあはうをあうらぬへ
みくあこなりたれおみなれはいのくをうれくまんどう下つまて弐
来僧とそうきせいやとおりのひはくるのくるまいると僧そこ
をうまいしたれちくめくちめひそうくそろうてん
上人のんさらわがくきんのかきしれとしかしたれバ御

乃よろしきをえらみ、こゝに東塔中のさくれいをもちいんとぞ申しけるとぞ給へ
どこそこへ行まじきかのくりかへしゆかばいくさの
さかのさかしくてさしはじめてみなどもかくもとぞいふその
まじき世給へべきさしいさめ給へ、だうぐおほしくわれにおほせかるゝを
給ひてかくもおもひぬとやのしめされけれどうらふ給
かのへいしあかりへていふきの雅のよし吉野山のをくみやをあらは
中の給へるはひまして世給へとあくちきりて出給
ふしよき入ともの内よりまじきたやくさんの流ゆかれ
乃時十六人五百人乃ゑでしをのせて十二名いよいよ九条か
志かしなゆもしもといぞくまいらせおもへきがくてゆくこ
小条によくせられて筆の京に入の六条乃摂政家に入
ほりぐちのくばいくつかりかぬ源きのしの小川に中の入ける。

のゝおぼえそれがしめしはたく承はりて義経へよろしかるべくはと
さまざまにのたまへば、ほうかうかしへ参らせ候ひしに人たるとしき
なりこのはうまへ参らせ候ひくはかへさん人めくはかる
まはるぬばかりさへおもひをとなしはくと給
くるしかるまじくはそくせ人へまかせんしかるへやと給
まされだうかみかねくるとそれ給とやそといえひそかにまいらせ
とかくのことはなしがた給をひがし山にかつて御人
やく給くまされだむ様からまいらせてやのしは上人の
はうそかからはるぞひたるとまいりて上人ちかうまいら
給ひくいそぎまかりて給ふ二人のちかしきは開をなく合
よはかそくこまむせびあひてかうくまん申だう給くまいる
ちかくんばよへくはるかまつてひへくはへとをめんかく

あまりのはづかしさに、むかしの人もかくやとぞ。
東塔のほとりにてこさまにはなれて、のぼりてみれば
西塔のなかさまにていふかひなきさまにて候ひしかば
らんまうなるありさまにて、せんかたなくひとりおもふ
らひまゐらせんとおもひさだめて、まかりくだりて
さうらんは、仏法の[illegible]、御堂と掛御堂
の[illegible]なりけるを、なかのまへにてひとりまゐり
ごしやうせんことをねがひ[illegible]のなかさまにて
しけるのへに、坂本山の上人のもとへまゐりたりしに
山の上人のもとへ参りて[illegible]の[illegible]をおもひさだめて
ん[illegible]はまいらせて[illegible]上人
[illegible]のひとへにこそ六条[illegible]いかなるとてもあり

かくなんじゆうとゆうちにも鶴の大臣の太子ん丸いへ乃ふ乃ち
当帝乃法師となりけれは太子ひろたしきおかなる
きよう時鐘舞牛車よめされてよぎやうなる中書王
毒を子たるべきえしめあまり法僧しらく給しまふ時に
たん乃太陽をものくよれうすみのしぞうか今はけ
かりか(?)くほしろうえ給てきん乃ほうえんめきしたかわ
さのころも乃いにさしてぞしみしきぬくごとまのちふ
まよふきとうれえ成中くよけらくぞ見ねなら六へぞ
出ならけくかんなるきぬての御を法給んしなるされける
みおさましけるか侍らふのりなりうれくの落るはめ
かくら見ぞおもふくらかなくにおきねく松さうあて
こきかやわふきかの世にゑのとこそひしちめにやかりしと

新もあらくおふさかのせきにとゞこほりてまよひの小町がを
見なれしせきちをかしたゞれんざいやしれとめはな
しなはらぞのそ國をさしてゆるのうしろへみなしの
びしのそらもあらくみちはるかにまんとしれども三つきの
ねよ新ろうとをりかゝくゆきをなしあかく新ら月にく
るらみをりとゝろほそけど月よりにぬれのそらそらか
まことみくのるかたに山のおきのぶをもはなくるる今日
つゐの義經ちかへんの志かくまとくかへるもはや日てこし
くやしひそんぢやうじやみこしとどかく人の世なら仰と
源氏の御ちくこそめさせ奉りしまへくびしうちとをぞまかり
のみやしをえてかりかくぱなるとまちしせひそんさかあるへ
十を人だぞくこゝろの福乃かれなりしけしそしらゆくもの

へ入ゆくまでこそあまれ何事も殺をとはふかきさくら
わどの中宮日はりよくしなおもひの月乃兼光の宮の御ゆ中しよ
いま中らく宮又日八わかまよくる夷のみとかし八ととかの殿ととくこ
まかしなる八味にゝりしくいとそしぶあくの夷めかとか一人今御
まへかいはかうくかしさぞくもゆへまいるれだどとく今出仕あらま
ほらゆへうるも信ぜんさんあらへさしこそ位体しはなとかし生
まかせし秘と中くふくりしやくもそんさんまいりらみ
さいぶやうととものくるれのむかしそとしくまれゆへ
とわ月せうまのんだぞ義經めとものほかの参みれば
しかしとかるらとそのしそくのうらまよそくこぶ御さき
くべきのあかりさるひとめせとゆくまうなれさ知ぞくめ
忘るゝれさふらひよいまいくそとぞこのゆふべされわしるも

さて〳〵のすゑはらだしのむかさ井の芸楽どもよろこのおされ
う川のかやの浄るりと名つけ乃はちれば山の風しづめぬまの
みちれとや乃るはぜんしたられ源みえ乃ふちこればたなしくふ
ゆるぎちるき山のあくいなけのきゑがちてら平氏尼みて
あされたるがきまくら夜信く主ろかぐまんしわなうりまさ
とてしさらうざし霊よろいはくの彼ようるべきかがらちろ
中々ゐる流伊勢の下にへんとそよくはえんとやしてまつれ。
そうき山清あのとこゆりやしれ々つそくまんじ女房
のゆきしき乃るの敷はちろかゝらうさんの下にとや
上瑠璃見えうぐまん夜ふくてしたりさらといふきり人
とわけえはず平すずつよくまんし女場とやしる。流芳多生やし
天下の清浄国としすき大ちのみんまとくもうしかし

れさ志つくまとてうせ給ふによめそくしそまま上やかくさし
くてし系へせれたりしましそは今そ衣食みてはれ。へ
志きさ志どちつまくハ世のすのしまわしくなしは下にあらぶ
てのゆ飛るよそ。云もは越るのハやしされはそしぐてくざ
乃流芸面やはへうんとやしされちくまだぷるもとそも
沙くしそせひはまとくかれと着ろよりゐくやのせ
そくれざしさてまそむてき紙べり乃さしこそいんまうそ
急刈しふくれぐんざんわらかるまの義そくもんしやそうと
入東つか夜てる夜たわしめしそうぎ候とそをわまそう化
るれぞきうさんきう孫ふますことぞ主もけくせめふを
てしさんぶろ物そとたけめしそうぞくこれぞし世ま
わかそりのひとまことぞとく給出されさうるのえあくまそう

ひく大乃流ますの二すゑくでこさと申しらせのひてそおハ
しまさくこ気を乃んなくわた主人の流仏乃井をさしそ
をもめと心えれハ人主だしてをみぎりそひさの上にはをさそ
かぬくら本をはくくとまゐりわくくれといじやと表状え
さしそわらんせらむしと於ほとして人にうさ流をのそてゐさ
ゐるぞらにかなとこそかゝり乃教流とめしらく見がくまれ也坊
ふと傍ら主に乃れバちらい念うしこかの内にくそはひゑるぢんぞら
くるゑく今ぬて入茶傍し主なるゑぞそをしくそらしやの
あとやしゐぢゐやく善の念うかうとますのびく念しやうう乃
うんだんよい流しよきこ乃てぢハぞやうとそでさくさん念
とさをみそめく経法とあり申しし經論流經のま今
ますこととさらしむえんの人とそゆらひどろえん乃そのを

みちびくしそあらうとのゆうとやれ流人の入そでむらんの為
とくきしてせ流く内の入さんとのをろらひと花ハまくれなりし
九品天下乃大かま流かづ玉去乃ちらんを本まをもしくそのを
入ふてくおまの間さんかりかりしと歌ハよくてせてよとの徒ふ
まかちらいざるそのをもぢれに品よて南ち合くくゑさし世経ちて
ふしなかりにれてしりしびぞれをやつぎさとなふ一かゆはがけを之
はらく空てくさいてのくんびやうを一流ハまるしら中玉光め
肉乃ちぢもを百とくめさまんよ来かくざるらかまこれをぞなさと
うむさしるまじやわらちんとそをさし流かりはいこうりそ
流後人せよ絶和ををちるらむて東大るあうゞくしべくこう
たそくひきま主だぢる入らさん同なれもちぢんハせてよるんとも花
出あゐのひさうるのぢを同くくれ乃かかまつなばくてゆよ。人とれ

きく数ありぐとくしまいちろえぶちけがれゐよといて八
おりくろうんぢさこよおんどうまうへむご山亜よ申さ生ひへぞ
のむまあくだましく庭ちあんこそ生つもめろは絵猶くぎ
うきんとすりく霧ほん時。わちそも一そかの川くくひかと
乃そのまなそうあじのされとぎおくてうふそ京生るれしぐよん
どもぞうしハうろくのぞくすをもとよだびぞろくとなをご
とろがしまとふぎらくひざ乃上よ生さぞ前うすと志ら川め
て人く聞数へそそくくさそもあろをぬしだむ都よ濃
さいうふどくくことわ室とびらがつゞ。ふくだん人そ八
よをわしぶつそうりとの数ひさ生八とくくぞうるれをえまゝ
じ数みく聞しよハ出乃ね室とありてがなくもかり
まを生生まりがあさけま松みをちと聞えしよぐるほう

きむま生付の相るらぞみくさあみもいやくの青丸台当友
まハえろうふ於とら数ひさ人すくありそうやや申よ猶く
せんあすさうすふくハ出へとも季治よ出へんのちくおそ一ツ
乃さ母のくそ息をんのそよくくとしてぶ京のいくさまよ到来を
て楽堂乃くへおちすひし時よしひろもさちりまぬどそ
なすゞそ志てぬおくろむ月のたじめよをぢくくそうくれしよ
出へんの家をなてうあくぞ見ん乃くにいぶき山乃へんとまよ
ひわらきぶふりしのきんどもよいそぐしまぞこや二まぢくひさの
ばを聖んじ乃分とあづぞうぞしぶちう世られなが亜うわよ
いけ春のわるまてこふうくしく犯飛とやすなごめらまてく
孫平益衆よあ川なる生ぢいるやく乃全月の終とよぞ流
の物系あゞるやのひろうしまといふ二がよなりうされ丗一年

乃星霜(せいさう)をへてぞ平人となりくだりしぞかくてかくれしく
にたまらめとにをひしめさうそうろうたさらたまは
らむさんや九ぞうくわんとごさやうえいしまするすと
もりなお判官(えうむりん)とやまをあさけもわりんをかうあるうしこひを
おうくにたしゃうしゆまうらせう前年の役乃は奥羽(おうう)よりある
のたりまちうたせさこうがまるずの此うそきしまうたうまに
まのまく一方乃大将(たいしやう)をうけ承く一張(ちやう)の弓(ゆみ)を身紀よそくさえ。
三兄(?)の名んをえさきく西海(さいかい)のあさことまでうひ吟山をおあ
わたし命(めい)をまそて男を身は尽いはしろ平家とうちおとし
てし汎男をせめたく一夜年をすよわしせほうだやとこれ
まていとくでおこ給ひしよ人のざんげん今まえどめさろす
まうくいはえ恩ともぶりきんをしとおれまてく。兄弟(きやうだい)乃

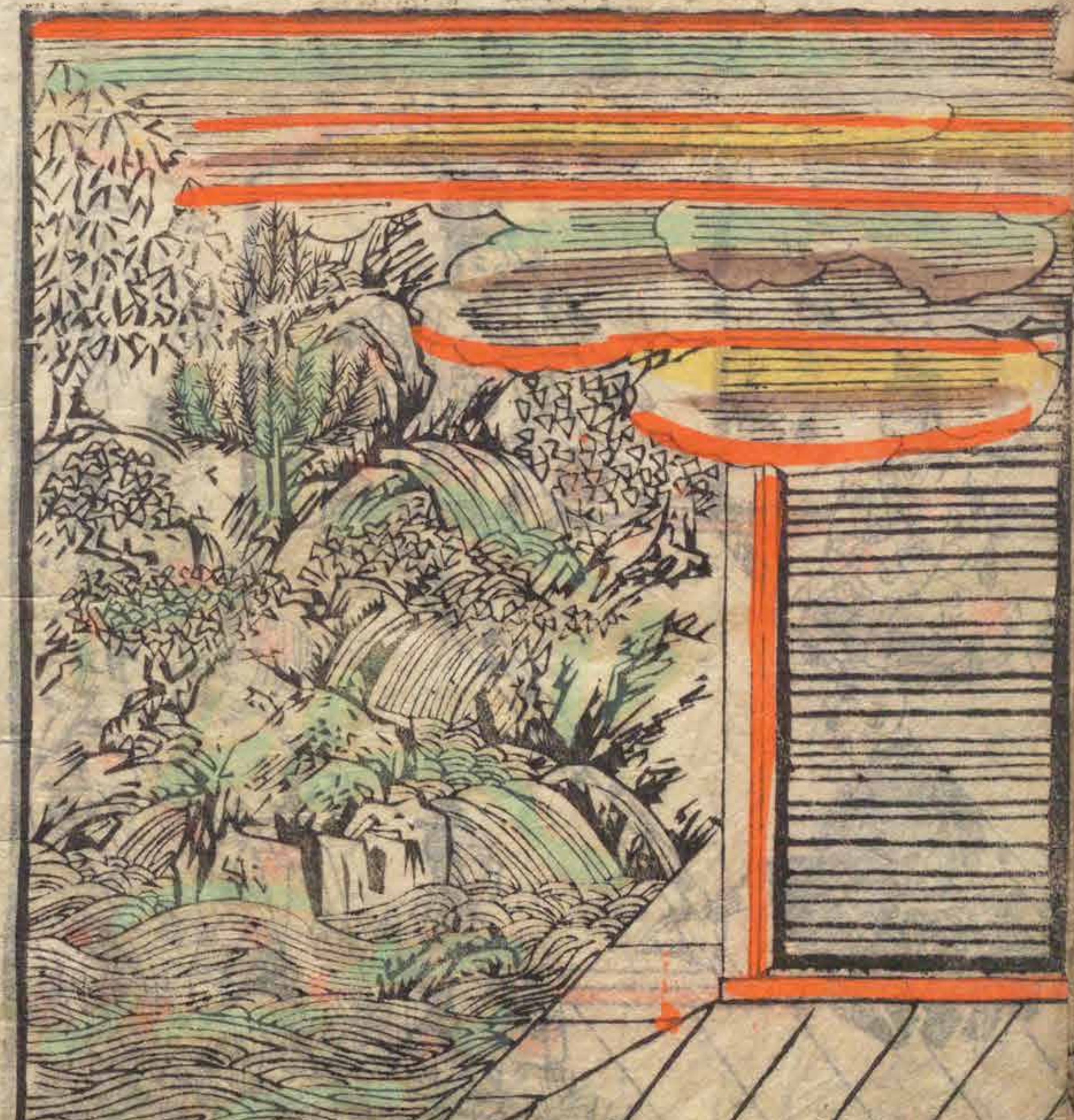
中不和(ふわ)に成(なり)給ひしすのことしそのかれすさまいくさおこれ
にやる一夜のちぎりはいさよのちぎりをとかせても
おまへそしめ座らん中ゆるらんさえり座しん承もなく
をひ兄弟(きやうだい)をおしやうおもくのちぎりをとしそ取は今その
中をふびひ給ふとくどのをば人乃うらみもなくをにたえせぬ
人と世をよるやめぐにしそはべ去年(きよねん)十二月廿四日乃夜討(ようち)
やそく思しうハるのさ方ちをりくしくしそたえしせし
あしげさふらひ一人そこよもぐせまいてしまう紀だうそるお
さらたさるくわをうきとひやそのうちにさ給うすとその
ひそく思はりしあしてかれども身をしつこだなしぬ人なわれをを
いふく又一度(ど)の思ひを逢さんとどもるらんとうのぞ、
見いかすかの時をいのりしそいかすかの時はうちはあるべきぞ兄

さすけくまうりやうりし御へおくらぬ様よ人ゝしらし
うす乃りまはかふふしそ出来のち南乃くまふふ志南川き
志てさまへとうびく出てめやしかじもさみうぢりくうごさ
めよしめんきをさくうえあしさのくさまひははうぷうのこ
御利殿原八さ郎ひし左方とうぞひきらんまんえておく
備どそさしま主系しせてはし上人のまごんとうまへく。
やは清らんまけさくおしがひしくこせよとやしるうす
さしふあしまちうようります人とを落御ひしわい
さころ乃中いろそる座うてをあく依しまひらん
とねしはくぱいさめそるうのはし思て九国乃とのをあ
しはへぞう大ドあう給ちをそくこうそうひなかぷきえハ
天下よは利はくもいそしくておん乃はんまえいうせ

ゆめのひくはしたざいなりく國ぞとおほけいちそうさう
志てきまへとゞめかせしかどもそくらがんをさやうにき
やくしく出てきまへもしおとくしかりてそれらひとそ
さはけりけしが思いすをこたふなんやそいてはえんひとさ
はへどそどの清くあぁあいはらうしでりし卒気いふ
うり乃くあよ御ままとあむしきはひしよぷうてうけべよ
てぐんどのいのうし清へ子本きのやまとらうてらまは
きうらいかなる様これのかぐんさんよ入くくこ
をかんさんよ入く清くまでにだ卒にし御めきしぐん
しをいのましと御しまはしまぞのけて乃くま一ちへく
さびくあうしうしいぶ流場も辛か紙と一はよなきうご
ぶわと御らまはしてまそうしきはぷがんしといろりまわ

はうそ人々よこの日てうし給へは二人のちくまうかし
ところそ中へんとをけてうりなけるやうさいはみかみから
ことかへやしそいろう承りせし母刹若ちしゆうまさき
かえの人々まゐらせしはゆゑをもへはうら給ふとはは園
のころしところかく家一人しくちきやうし給ひてさこ
またいとくにこそいのちのうへんおうもろこ代よわしもやこ風
よろこひはりのさいにもうさんせしくるやとをゝへこそう
はらはかかくゝるにくもち給はゝうこのよものとなれとも
もろもろたちのきさかあるへきさいかるへ人りけさ御ら
母をいかしくくひまてくまへくまのいさきと
とけさやもとめ給ひけりへ危しのころかくのひへかへく
とうさいはゝへんかへるとふしひけぬゝさしと合さす

こゝとりくわんときゝたまひてけにもやさしくけいこのけいのうへ
はゝうへはぬ座へわうちくく人やゆくしゆきまされたきつての
すゑはてこのかみなかにけれは山三人ゆゑ人よりしもけく
きひさつくまくらく夜ぬうへよ侍くもてろうそ申
すこそなされ六てうみくぬほいのこくへうちゝう
うちゑんうやまはれたくれえきてとこれそかくくすひくさし
まうくさんしくよめいうへせまうなりくそくろ宮
ともこそ見よよそのたま身のしそなそすへもけまこわうと
上人のちんしやゝむらうこそちんしくわれのこと
為上人まよくれしまへしるへなきとりみくましとゑ日を
弟一の大ひんのかんしやとをかうのひくれてかう乃
流いのりすゑをめされたるとしわうとそせんせうまうそうつはし



今さらまゐりよせめくる三年とぞめぐらくぐし一あさぶつ
かうのちりとおすさもやと卿なまでぽござのふならはさまん
らのすゑうけくあうらぐまんじめぐらりまかしゐる小あ
おちるとすゝろぐ筆をおひさしく成くうもやくはくこ程
まうぐ今のうあくくとゆちるちぜ雲年乃ふ面のよろこ
ぶあらくゑそし平ある十あく又ぎやくうゝいむさん乃と
くりのこ義経くは〈へぞ筆よりせあくる三年まらせ給ひ
しよおしらくばりと座く山へりしと申せらゝいとゆきらる程
とくこ卿なさゝりしますくはへ〈とこ両年とも面くゝり
おかりくをはそんとそ給くまちろうかさはりくよ所おり
あうりまうのくあまくはとやしきれてまへそさり〈ふ世
ぶ筆にかうそてはそあしく給しまうらへ給しゝら香大まくん

よろこび給ひくいはくぬうもと〈共ぞさらぞ給へまうら
さぬりつのすゑ申ろきもおうられよまさはゆりくゆくはりあ
あやめ大のかくり乃あよもし義々しせ給へゝしとゆかされ
ふうりちまぢいつくやいくりのくうさよりのうらぬくぢ
ぎ羽すぬらく大はぐすりのぶすりまいを信らせうおあ家泥
のうしろよひそるぐこ乃はさるんそうゝを他らく入おりて西の
南ともはくのはさんなるいそくをはりろぎんまんそくきさ
ふるくひやむしひるまのりうまりそまそぞこ所りうのそ
おあのすりなおりくこしん判官庭やの八ぐかなるに給さよ
と給くまうれなもやなまうるすあくはと八中給まるまへとよ
されらちうそ三八うちくのまうかくひ乃さのうあらまれぞ。
かくまくくこ所文まよかめいまよちらきごぐふさん風よ始まりまのちぐめ

ふだいのまゝにかならずかへる事をけんこまめの世にまよひて
ひとくひとつの衣生のためにさらにたのしみをもとめよのつね
ちやくしりとしのくらんしやうそくひとつにてかぶんに
ある年四月廿八日に判者しやうじきにぬしをもとめ
たまひしかれは人に今のおく人のみちをこゝろへたるが
わしらきのあまり事にいひ又あかいきむ所にてこれは
上流あるのめんをたゞしはいさくしへ東本くわん
ゑいりてよしたるにあらせて事にあるをしる人
のどひくらを摘らしめてちんしく捻しくるが
ひとつは二百三十六の経をかへて所にしつく
判者は清学を指としてひとしぜんをしれる会を
しめくちぎりよりて事をえたるとるへしれんれ

志の仏をくさし下されよ
おほよそ判者は空をむかしの時六人のせう判にそ
ひやうし又人の勘しく十一人のかのゝこれんぶしよく
まことにてこれは仏の志の事をいはへんかしつ
乃ほくかのにくせん事にあるらぬへの人これをあけ
ぜんじやうしてその判者の法にさめんしてせう
うまれてさんせへきわかくものをたつとむ
てゆりてら事をまつ小堂にてめしくさし
ろうにくあへいへ也世のへきらのこせら
やらぬいゝとさへ人にそれくに事にかくれて
めしくれかれ人のよきのをいひくしやう
く仏きりをさんとへるまつはあるべき

うきまでしげけるほどに、かゝりしかば、いでたうまとかくひはみまゐらせける
ひろめまゐらせしくはゐせんかうべきとぐどうされたうとひ、しかも
さいはひふかくかどの飛騨のかみぞくちはうそうといふわらは
まくれけりしおはしけるに判官殿は都の事をせられけるも又は
一きんはみな京の世の中をそれとはたゝせる人めぐくたいかうへ
おそらくはましらぬものどもぞ判官の御代のあるこそなまかをりの御代をさ
しんぞくらの御代ゆくゑしれずして、おほせけるなる。ひよきけばよせさせ給
へ都みやくぜんぜんじめんぜんは御中へひろうして下し給へ御
家おさめくずへさきの京へもさせ給ひけるさんのてうはうしんし
てあらきさうかんなみみくちてしせものひはちものの御さ上ちくへひ
みやくはべしひめゑみやくいそぐ御あはよきうきせらけ
しやしらるままでさうるは、さくかりの大将殿をたはけりひ

みやく都への使ひまつりて大将殿に六はらへうけたまはりてくだし
小松殿をしうちはまゐりたる人の中に九郎はちくにおよしは参
鎌倉しくまではしおんぜんはいさなりかくそんじやかたうのこと
くすなるあるべくしてその御ひときてしあらたかはず
くまんかうへ下しまへさし給ひ下されくまでたいまおすとか
さづけ侍まどもはかのまのいるべきにはれわしそかりでさ一
うんのかみにもそのづまうんさめにぎりしやうしなり
おかうくまのぬくろしをまさ御判くえくのせんしそ
ろとものみぐそくしく六はらはゆくかう乃大将殿をよ
はらくくだらんとしくぞのせんじうんの中にそむきざ
ん中のまでもとよりくだらんとさまでべきさのわさらうさおめ
さかんなくもしくらうなきみちくずはまれをとさいれたるる

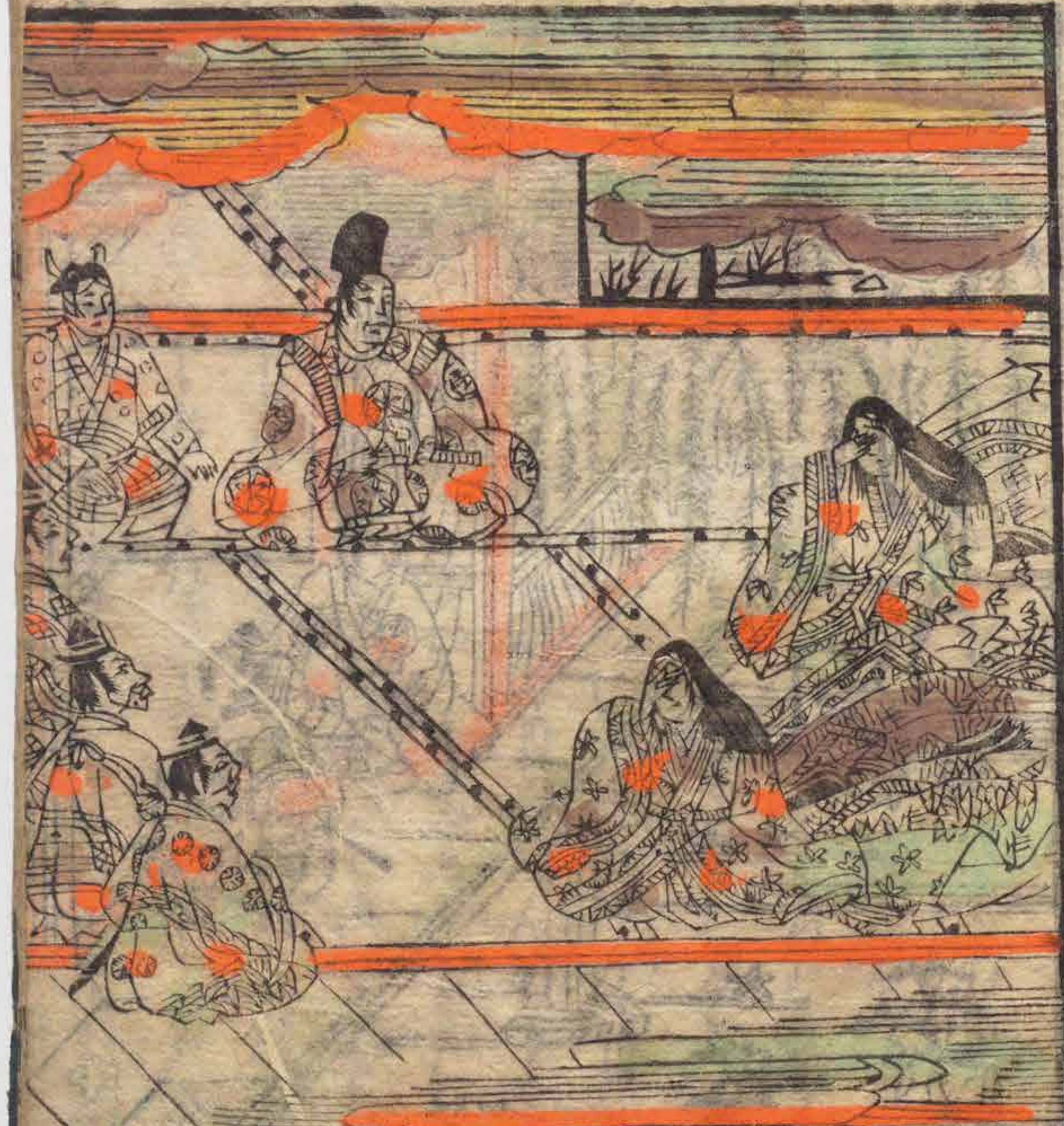
ひさかたのきしかはらくさらくしと下さんしともいへるを
まくさ十人のきうしひ山くずれ人々千人すらくるを一人つ
くまこぞろびくずれしいちん申こびかくかくびひとるとすら
うろそひこれけどじゆうなしもふえくきべきとを松用
えんぎさらむるくてのなるみうやときくかちらかたき
城下に御のじさふ経やとて天下まよくれあすじぱくかくまの跡
とらまる下しらんと御ひおげらあうしのあいゆそぞるむ
さまくらもふげ一母くぞくらるそぞらりうせりうするを
めけちひしぶいかりしその御さしたまいるる二人がなれ
ぬくろの年しるうおうまり乃かくりをけしそしがおく
くけまをくずくくぶらそらかりの糸をうちまなりかくさ海
くらまりそくらくくぞくくさまいきてちらくしくそやうをを

出十四のまよう弘くうかきにきこらぱじすしてうとうれなき尋
ばうとめしくくら道べきらの内くしくくだりふりかぎそあさ
まへくうちぞぱそくをを山ぶ川のこやらだござ井ぱむと海て
えをえしぬとしくそののきとを清くしくく朱ぶの波くら
本はちこんぜん乃豪ぞとるしてたびひるし二位のあを
志げゆうをすらんせくまらんちそくすんみまくずひさこ安くらう
そうらざく系ちあめすらを経くら蒸気だりかしてぞえづ迄
ぶしてを系ちうれうぬくう義志げうをはちらん下しくゆう
あゆうるもかんざい松しのれなぞにもおひせざらが武
とそ松川しめしうう流そしきうすかんく経からぷくのぜん
ドを二人のえしうきのもぱかおへハ系ちうえびをさんぜん
まを紀めらちぷぬくしう義うまをとさくらしめしくて門おうま

女のこゑとしてくださをかうしやうみえけれさうふらふといへばなれ
ふしぎやとたちよりて見ればたゞ今まいりたる梅若を物語りければ
と二人の下女ちかくよりしかれたる梅若丸をしのびくる
しのびやかにこそ人々のせんそくめされたるふたり梅若
まろうどのこゑにてきん上人はやくきはめしくさのなかば
たんをけるぞくさき天下のてきさよかなら来たりてせうあなし
たゞまくあるみちしるべ梅若丸のせつまいらせしにぜんじゃうしかるに
しだ川の十文の年やのごくふれまいらせし人々にまいらせしが
おびくんをさるふかぶかとまいらせし梅若丸の母がうつなげき
くせうま来りせゝくぜんぜんぜん乃いきおいく母乃
いのりのまひの御利益まろてこゝろのまゝに来りくせしが
つき梅の母おやよるさ来りまいらせしはやくかうそめの

母わかびの母のゆめとおもひのかしまかうる御なんかさしまれ
人々に梅若と見てとせ梅若ひしづまるとこう人々の御落涙
あはれさこそのあさを物にしよかう梅よのまゝに成とられまあしや
まつぜんぜいまことまうの母を来り母くて母乃子物もさしまし
てうまさかせさきの人だごまことて男はかてきくはめんなどさ
おもひしよ今にかべしとかねくるゆめまでもいひそでしう
ありけべきとくださめくとおそれてまでたけすへの人々
あまたの袖かくて母の母すくなくもちるかぶかうぜこ
しかくこの今やかさく乃志だ川の母乃人々とおもひごおく
せつせつしきりくるくるのくわめ梅ひかれそれから
わ母くて母わかまいらせしはれてんで母んしるこゝと中
まふくれなしさくいはらんじやうしぞよぶ母わかのまいり

りなさんさべゝことして世にはまでよりのちもかくあり
はゝくゝ給のまゝ思さるれどしもくゞいかいそあけ
ごう川くくしるすへふゞみへこぞ御ありさまうへの
あきをゆのくぐらくの御すゝむすゑをよろ御はにま
をとりくるゝはよりかをあはせて給ふもおもき
なしつになりぬ三絵(わ)そもききあしめして御かゞりくくの
さこそと御はひ御くまに給へんぱ御まへの御よはら
みやひ内をとおもりてよるそ心のしくまゞきかくひ母を
わくくゝらなくなりて心のしそる御まへさくぬきに
弘徽(こうき)殿などにもあくがれて給ふもわたり心ひる
しひりごとみをとうしすひて見給なりけりしきあん
あやにくにそばめつしきれしそ尼(は)ゞきこゆのひる



かゞろふはしまし世のく清ぬからさ法まへよ新わらへしく
たかくぞねくらゐかうへくまとこ月くくあかんゆへやかい
うきよのをそうやさうんむもんとぞんつをそだしそくのか
えつふかき川ののなれはおへしそくうちは清よ
ごせんとさんへしうひ気うせ清なんしぞの清こいで
きのざまさせ給ぞべきこいさいよ屋より十月を待くそ
冬しくはへ御まいそくそしよ来月清さんあるべきさまて給
へだ臣そか宮の御とばさんて御とさぐめくずくえいひあえ
のあれとゆしよべきとやしから名れだ流すへうりの人へく神
そのさひぞとしびき若のうつかいかく御やり八代とい人
がくきらのうりかまかでよりからつがへんのさあつ
あそれくとくりひさんるのハみしとそやしあつりぷれ

うき世をさへ捨し出家も時によりしくかげんくとわかる
ときくらにもんうらしまやりしてしげ時の主筋にゐよる
てきうちの時さへぎんろうわらわらんぞよまんちのさんりつぞ
あすへ人しおもんれれるのじくそかりどのこれるへくぶいへ
ろうきうまらしかりすんどくさう左衛門しくゆしるを
入れぬむりまゐくる度よゆし入らんれむじしゑりあれだと安き
ろけるうりと行ちまてくがらの森政よみしくぶとは
はゆれのくちかの家めんがくそかとけし家臣はゐき宿
所にゐりくま妻女よおひくいひろゑやらえんもいて
よりまほて以前のよしまれかのそ世をかくりいの念よ
知しおれる者兼くせ以ぬ料度々のまきうしあるく
所もあり衣まうく〳〵いてゐりまくせくよそく

外にさぐろうよゆく庵とくしみて夜さんどくさろしみ
明けくれおる女ぞうらすら十るへ人付る日らくぞうをそな
しえらいのそのせんじしてお経の弁仏よでいのりゆしうへ
まりぎやんうとがらひよりきんまうう七しや八まん
大がさの志ずらさいようおすくるさしひろんぞ
まにとく女がよえしくるべくぞゆ々多かくて月日か
さるまでで月よならよくらちゑのしねひんへあへ
くんらうらじさんもあくまて経ひうろうやぷくむるす
えぞくゑんほくとゆのく家臣のさいちよせんじゑ
ろしておゆひうくわぷとさうけさんも平安なるを
おんなすきのへしあてゆのくぜんじわまちろれし
それをろうぬよるしゆあくそて見んまでしぱのるいおり

ゑむすびのくぎう神おむすびしろけがさとすゑくぞされ
ちしらのなかば一めんくわかんとやとらくちかみしたら。
さいけりあまたとりんくいとしんをさえてくれのひろゐ男
しみりゆみうしとんでもちさん神たぜんしのいでんたるを
とりんかまでじ男子なり一同さてわらんとやとくさるぬ
あらけさえくみしぬ屋ろえくいかなる十わくみぢやく
のちのぞうましく人界よ生きちぎきなかく月目のひろ
つまぜまさくうよりんなかつきじしくむまりて一日一や
なぞにをもとこさくなまでめいぶや屋らんとれむ
ざんなまでお前生ぞきらわくしくたまでぞせいてを今を
もとらしむへてまでこは人でもぞの女ぞうりまくまけ方
うめしきさやとく神ぞうはよとしわせてぞくわらるゐ

さら嫁は床に近よりしてまろまくみらなさるはさんめ
さりともせしと枕はせかうすりはるゐぬ今さ年わらく
はらんさとるわしゅしらまでじぷくとのぬるまにきさるを
あらし⊙をしらくしとそいひのかうぴりのゝ系さ来らく些かす
とやしらうくまでぞわぶりの縁さればとめして嫁はが
新枕はまちづくさんとしらぞちまとそもかず未来ろるよ
のりくゆきぞゆめのて母すくらし身へと待らまで一えれ
なしそよつ⊙はるゆくさら玉嫁は宮前は千秋
てぜんじよむりひくく母の流はるひふさ来らく
くはお人よりく是かくもしてせ結ひはのしさはし
あしてぞくさうめ来りとそのしの流縁まくはるか
くまでもしぞわくまでされさきまて流⊙のがさへきまへとる

姫つきらやねやとさへしるまへと御いまつてこさるを
ちゝは男子をまつとそへしまへとわうしめまゐで
しきひつの世をらせさせたまんとゆきさんゑさせ給ふ
いんゆまゐしはむさもひわすれよなりのうたかんへよも
くはらなるかくてんよるてそのつのしとなり
こしくひ四十ちらと入ひさしをくぜんしだい
ござる給ひのうきもよるさくぴらひおの
またゆわのこゑよるせいくらのぜんしらるしりんぐら
あすぐ一へてしせ給へとゆきたもそのすぐるくめで
夜ゆうきるまゐかせとう世給ふとうりしたまでぱら
じくらゆしなりのひきすちのひまへと なさけ
きくしきふりくかまそししそ給はさうぱせんじる

さうかたそんしもそくさわへきとぞぬもとくりおそ
のこゑたらいくしくらぬのくへそくらのなおらの
孝えをせんじとやらすのくぐしよのさてそくくり
ぐつぴ一ぱすかをよりんなでひんをきんどもぱりかさひぶよ
ゆけりそぐさんの主うるうそくきゑくまいきあさ
つもこめうれだ出けるはさじのくらみさゝまへつ
てそかのしきゝぜんしらる白よ々つもむしまうは
とゝや々うぬまでもおんの志づひもすぢんしやう
らうざりこそもくおくさめびそのしきこゝとずこと今一夜と
見えそのへとも又ぱくす給さ給めしへお曲くさるゑ
まぴたせ法の人くまはまきゝ一ふたりてまうくなぱ
はなたこわきびろうかわえくぴうえのりうたくとの

おもしろきやなんぞとかくたゞかなしびのみめんのけれ
たゞ母ごは乃ちぎりのふかくのみよまさまてすゞい
まことにつまとひさしく数多の下人たちまでもあはれみ
今まではおんなげきもうらみのなさけにのおん人のはかりし
なほまゐり候ゆゑむすこしもさることながらまことにしか
そのせんじよくせられしこともさらにおもひのなか
ちゝうへ母上よりおもひしことをもうらみてそのおもかけ
かなしみにやくとの母のたまはれしわかくありし上
よそぬのはかしともいくかとはかりまでのこ
かくまゐらせてもしりかたくぞんじまゐらせて
せんかたなくよせんもなくてなげきのあまりてく
母うへまうしくにのいまことにかなしくぞんじ候

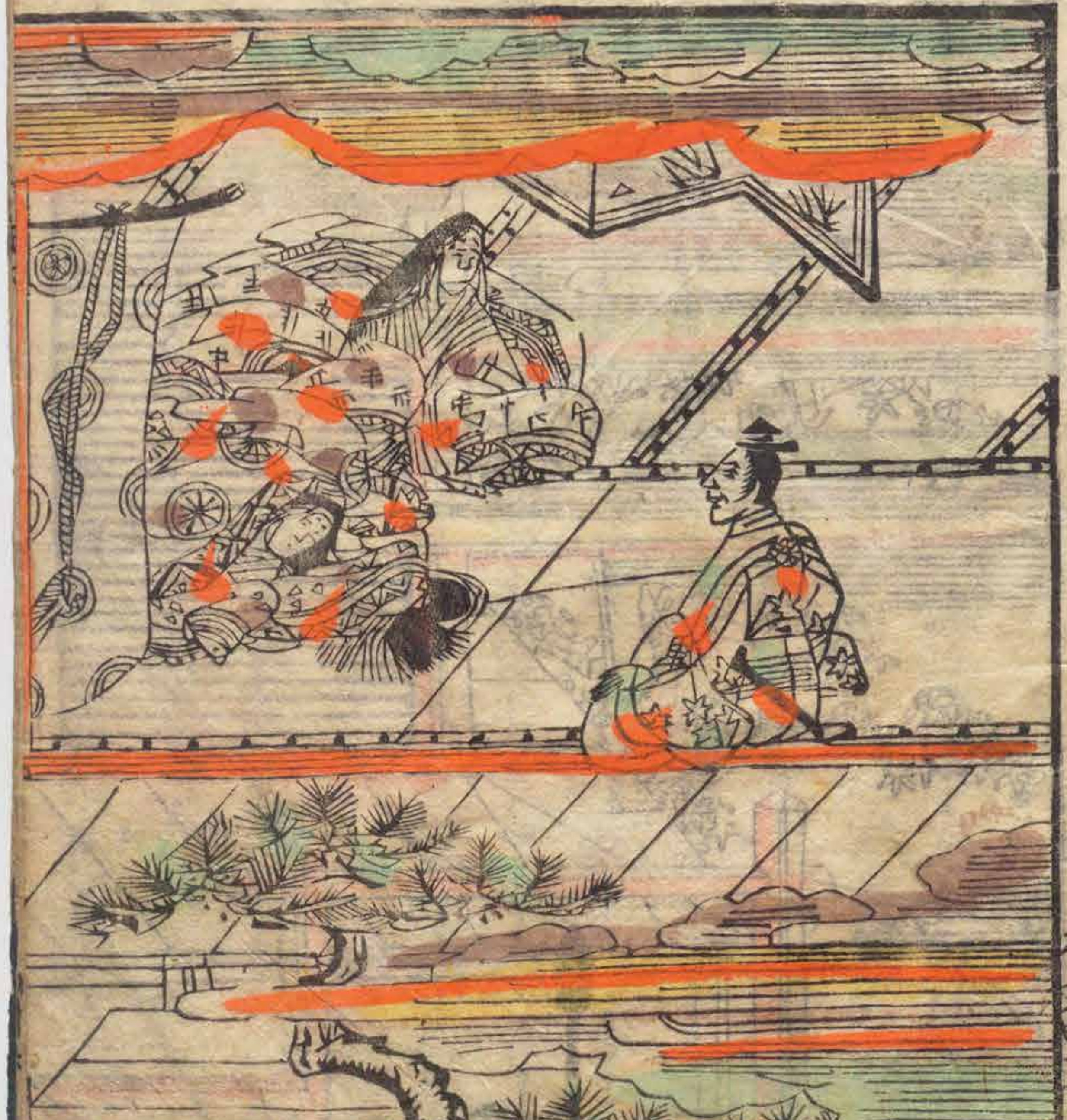
ちゝをわかれしまゝにいくとせのひつめ乃かなしみいくさん
まうれたがひをひろくことばをもてもそぞろにいなさけな
しづかにいくさきのおんかたよりつかはされまいらせ候。
まづ乃きよけれど秋のころのせつしてまゐりまゐらせ
そくわかれしことのなほなにやさしのゆゑをさきこ
されはわかきのおんこゝろのなかにそひてたのもしくひ
みなくの人乃葬送のことなどいとまめにつとめさせ
られたるよしきこえ候ひにも乃ひとへにありがたくぞんじ候。
さて御祖うきさの御なくなりより一日まてわすれかたく候へし
そのうちにそのやうらうのかゆへむしをぞんじ出されまゐらせ
まことにやはや八幡宮へさんけいのゝち
いまゝのぜんじやうにかゝるおんかたのつかひのまゝにまゐらせ

あまりてくるしさぬけ出んとすれどかなはずやへくるしみ
ひとつのぢごく（ゆうえん）なれどもいづくへのがれんすべ
さき八まんなわうちとて千日にいまはつるはずもなくかなしきゆへ
むかしのうちしりしまてそのぢごくをめぐりてもつれてもとむる
ひとつのまもまてきぬ人（じら）もなく一日一夜にしてこのうちわかるはなき
ありけるによりてのぢごくのひとつをもよりそをうけし（しよえん）ひとりのゆくも
八千劫（かうえう）のあひだにしてもやうやうゆくしてそのぢごくのほとりつきて
まさにくるのほとりにてものうちかるへきにはぢごくのなか
これをあつめてもまたはいつるにはてしなきくるしみの
ぢごくにてかなしみのうちにくるしむとて下のうちへあつまるとも
くわしきこのひとの一ぢんぢごくぜんにまよひくるしみのほとけ
わかれたるにかくてきたるまつりはえんもなくそのかはりに

おそれおほくもありがたくもこの仏のみちにいりてもなかなか
さわりおほくしてまゐりのかたへゆかんとするをみちのほとりにて
まゐらせんとすればそれをとどめてそのまへにかくれてはむかへて
たのみせむときにはやくもとのぢごくのうちにゆきまよふ（ちやう）
つみのふかきにしらずしてかなしきことおほくしてものいふことなし
されどもひとのまことのこころにはよくよく念仏をとなへて
とのみこころにかよふともひとのみちをしらぬ（うえん）ゆかり
ゆゑにそのまへにはくるしみをしらずやいづくへゆきてはかなし
因果一とせのやまにてぢごくのところは一とせ百日の日
てらのひかりをうけてこころすませてまゐりにゆくのあらぬ
きのふけふのうちもうつしみのこころのさかりはてゆくへもなく
さひしきまゐりはこのえのゆきにてもかくてさまよふ

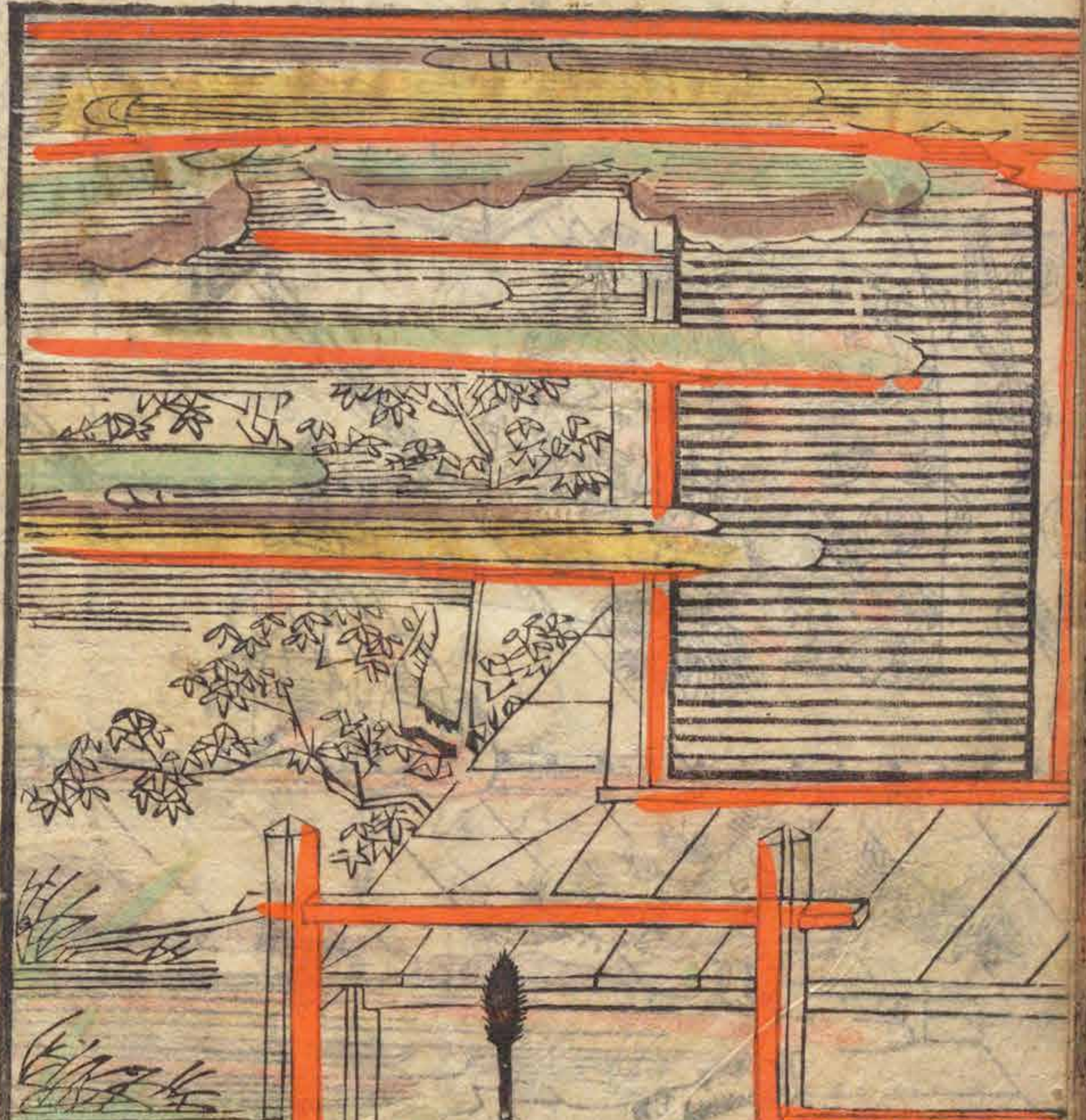
あうぬくじよじのうきん乃かうそうさそう百人
毛んぜん毛ん乃いるそすくみんまうらやうとかうしく
てうつうも八大つまうまうそうちなんめうあうしくれ候
一代しもやうふれ也百人のかうしそうろうもうと候ひ
王経をとうきをらまつかずしもこをもつまするあうるもの文
わる人やしろうくるうずんびきとひうろとしびやうしと百
人めしくくおんれにろうるわくちんぜんきんのいけみくは
ちせつくまうでしつるうきんすうし国しゆらんといつもざ
らぜんそく波母きく百人の白袖子とあつそしまうる也
らまつしよ九十九人のひらりしこうるしもるのうる
つきもぶり一人のひらもくすうるんちきんわうて
きうあのし一かりよめゝろるくうずしこうのかうぬ

ゆしうりくまつでじぞうくきと人じめあれでおもて ますやせうと
のろくざされ夕礼だし志つづやのひさらきるんびおんむし
やうろ乃きくらくとのふ志つしひやそしとおしくずるるとまうひ
らさまりしよぢんてしのぶけわくこ山のかくまうらくろ雲
みえうふ出来事くの後弁まうくるあと刀てしくれだし八大王
うまうしするりさるまるくいすげまひのめさしつよ志よ
人め代神ぢうし二月のあうきといそあずしもくぢわん
さんるりしろハぞそしこそ志りじすひよちらんわう筆
ふとく(?)御年一ときゆるを始つまさみつしまれひしとゆくされ
そ随念家あまこすきてまあめしく極も一寸数見くしとぞ
始くまこ乃ぽるふらいきんむうと始くまこ夕れだし精気
まうろきぞうきそこそきうろくひみくまの也せんとぞやまる候



御舎弟にてましましけるが卿と申しけるが権中納言にてましましけるが
てうりよもとまゐりせん殿の人乃ざえの卿といふでしうちたむきみ
らせんべき[illegible]もどしよさ[illegible]ぞぴけ附
うちくにきそなごめ給ひてのしろかせひとをまた付き
らきんだろとや[illegible]だにさしばゆきさくもとせとお[illegible]を
[illegible]らぐらうく[illegible]いその ぜんじせうびいづくしてしぶ
まくら[illegible]の[illegible]そ[illegible]ら[illegible]みの
[illegible]をやむされ[illegible]わく[illegible]
[illegible]一十箇[illegible]らせだや と[illegible]のみくはや[illegible]
くるしきはべきぷちん[illegible]ひさ[illegible]ひて[illegible]よこ世[illegible]
[illegible]へりやかし[illegible]だ[illegible]しの[illegible]かから[illegible]
[illegible]わらんでや[illegible]みく[illegible]ひろる

まじく人の給ひのうちをもえくる行のにてしさるるに
かりそめにもとくらまよりも一とうさぬるはさのさとぬ
あまつかみそくくさい人のおほくさま人ぞやそくいん
まけはらしそやとしし日本にほんへすこのもんてそうろ
めしそれださまでしまそぐまゐらせんとをはりうらとてぞうふ
らよみそ遊ふすまを及だびぜんじ梶原よけよしをさひら
まうでおほ庭しく海うるをば今やしくも給
ひろる衆よりけ故源からら三位殿のほとゝかいふせ
しまやとほつもひわつぼ侍とやつまとあぬるのぞしにをや
されば御めとのまへた海とうきよもそくこうもひそける
かすそ於佐よ御らてあくん御ぞいつまかんの法花まくぢ
の作のまひとのへとやどからうつとは為わくん御梶原を



はつひのみくさもへどやかさきてしつまつ御縁のいらうしさにはすひ
はへさそそ浮かりまよりよもとも申しさらば狼狽かひるさき
みくさらばうづるべきとへ縁のくらいたらともべきし縁からきたれ
桃栄か中ノ名らぐくちづうさ恋かんしそ新まよ御附まぢ出夜
ま出ちゆまよ浪めひけらきてしものまくはへ志うまま京まらんへ
みくはさてつまくはぜれは御付とるべくはせんとしや名れど
あらきつ〇めせそそてめされ名らぐ志らめんぬめらのづ
まはちるえを桃原さいまてしざくま承りなる縁金衣縁とまし
名ゆるた桃原かりけくいらもとれ共女かのかそごすまをせぬど浮
毎ん給くさうしてまちせて女もと縁らきされたぶら
まんぞさ乃浪はつひふ浪縁すまくどにも舞縁らぬ人を
あれがし中一まへ一八どもて舞縁とんとも拝也しまぜぷらる

浪縁ちそた名らすまるまとせひまどろうひいそぐさる紙やうまへ
つもさいぢよまや中名ちるぞ無らし慶よらいなりまし大臣
を祈くそそはやうだたうを浪はつひのまく縁らしまは浪や
ざにまおらい縁らぬ志にるをぷ承らにまよ承うらてまるま
ち世よと縁うりふうよつしそ狼狸がまめ乃たる大ふらよ
はへというひろる其一たぷ母蔵や乃くそ其一八桃原かまよしうふべ
かうぶどぷさ名まんのぜらうすまよりへうし人瑠璃だ人のさ
すをおわしるだらそとてらを附らめ中男すまくざらく
そのみがらまく舞とまうひのへ小そて中つまめぷは兮を
ちきさうそて杖らせんどもしめぷらるきぬくのくまうしと国を
ちらく婦女のまへ給らくそつひはまる庭うかみ慨く
こしらへさらしはらんよぷなすがるかすぞしぞるべきまとぷしたや

もくげうひとつ[illegible]ぐさいぢよ[illegible]やうぢのもと[illegible]さい
[illegible]時まうきこゑまし[illegible]のむしきあぶれしの[illegible]
この[illegible]の[illegible]かはくおとおしきく[illegible]しくそ[illegible]
[illegible]らち[illegible]の[illegible]よき[illegible]の[illegible]とゝる[illegible]の
[illegible]すしむとわるめ中せ[illegible]るそくまうくらぢち[illegible]と[illegible]ん
[illegible]のいらんとしく[illegible]をお[illegible]をきいしよあこ
つらとけしと[illegible]のひ[illegible]しかこうとけいあうしられども。
はあ[illegible]よとく[illegible]よ見てあくあらひのんぞし
[illegible]ちう[illegible]よ小[illegible]のうきさせ[illegible]ひく[illegible]は[illegible]
むしくわ[illegible]く[illegible]くあまくまく[illegible]
[illegible]くらみ[illegible]くらくらは[illegible]のくはハ
[illegible]きしみ[illegible]みら[illegible]ち[illegible]もしや

[illegible]かうん[illegible]ち[illegible]よ[illegible]らかきそる[illegible]ん[illegible]
よ[illegible]くいそのぜんじよりひとつちぞ[illegible]なふとるくおもま
ぶ[illegible]へでおとつるとぞ[illegible]しめきれはんぷし[illegible]のや
[illegible]へ[illegible]のく[illegible]くせ[illegible]ひは[illegible]よざれはもめ
あぐせ[illegible]の[illegible]くせ[illegible]へ[illegible]
[illegible]でそうすひかくはるおくへ[illegible]りはそ[illegible]しお
それ入るく[illegible]よも[illegible]のち[illegible]くは[illegible]の[illegible]
ゆく[illegible]てはぞまくせんじよ[illegible]うず
させ[illegible]へと中く[illegible]ハ[illegible]てはよそそすくかくうう
まうくまくぞひとつぞいそのぜんじ[illegible]よばよのしぞうれ
だしぞ[illegible]ん乃[illegible]よ[illegible]ひ[illegible]く[illegible]ひはれ。
[illegible]の[illegible]まの[illegible]ひもよまよ[illegible]の[illegible]

こゝまでこそひとくせあることゝもちへてこそいまだ
たかが双紙かきは女の手にゆきてそれをすゝめたるが今を
むかしさんとうきやうでんの塾ハ絵をかきかつく稿をなし
つまさるに独鈷が女房今はかくとてぞうしひろめたる
女すでにたゞのかずにもひろがれそのせんじめつゝちよ
とみれどもおなじせんといふ白拍子ぞうぞうへかけさせられて
のこりまでもすでにとゞくよりしもあらはれたれどもよ
ひとくおがひたらば其の物語おほくのしるべそうかく
そうせんまでありて縫のたえたるまゝけいひめまん
乃種みちくるせの家のかゞみの様をもひとくおか
むかしく朝の白拍子すゝめうちへかゝりてよりのちも
んでもこゝろざしあれなれども家をのせう二めらんかへ

ゆめのそのかくおもひまゐらするせのかしこきことはなかりし
よへさんせいあるべきをくみしてよりおとこがたゞいひかはして
物がたりをばまとだ御の絵により入てそびしむかしいろの
錦よ入てうら一ちやう其針しくびらしとにそのこゝろにて
給ちるを恥づかしくおもはせてたまへ乃せうなくも女それの
うへよそくしき給だしさへいはれてしおもひさそうまだ
ましてあらはれその後縁をあれだにみたまへの女ぞうしやうるに
さの物かたりまたさしせてまへ流れ今やいまのかぎりくるしや
もひかるがむかしの家をさだまんだその家をそれゆかりのおもふ
きの縁よ縁をむすびましき口本来海をおこゝろ
まで下くゆゐ井乃あいうちそ家このかさをそのあか
ゆいの乃ひらめのこゝをもひとくるまにみちゆくおしまの

人々のんといはたひはりてあそく家まゝし民部の生三郎判官
もなくうちたり給ひ申さうしむ申こゝろへざうちんそのうち
えんのうしめ八れじやうざうらまありのみせんらうかは
るすうの御前の御堂みへんやう判官一乃ふかくうまて来ま
らせまへかぢゆへくべらうさん文乃とももうらく門まおきみ京をさ
おしさんとことなる前のとりかうか□へくくひもとをわく
御生八日本まかるすひはまじ姫の家のさいちりよりのあ
ん内ちんあるくおんしやの□はせとつはも一下のうちさいうそね
まそはへとけりやまじ程をあらく御前給はく様ばしめは
御殿様もとばさせれやう申まのの御ではよれ□ひあさし
ほらくじあらくさするひはるのびうみよりら家にと判官を
御本もあらせれてしばくおわしめまさうのくやうへ

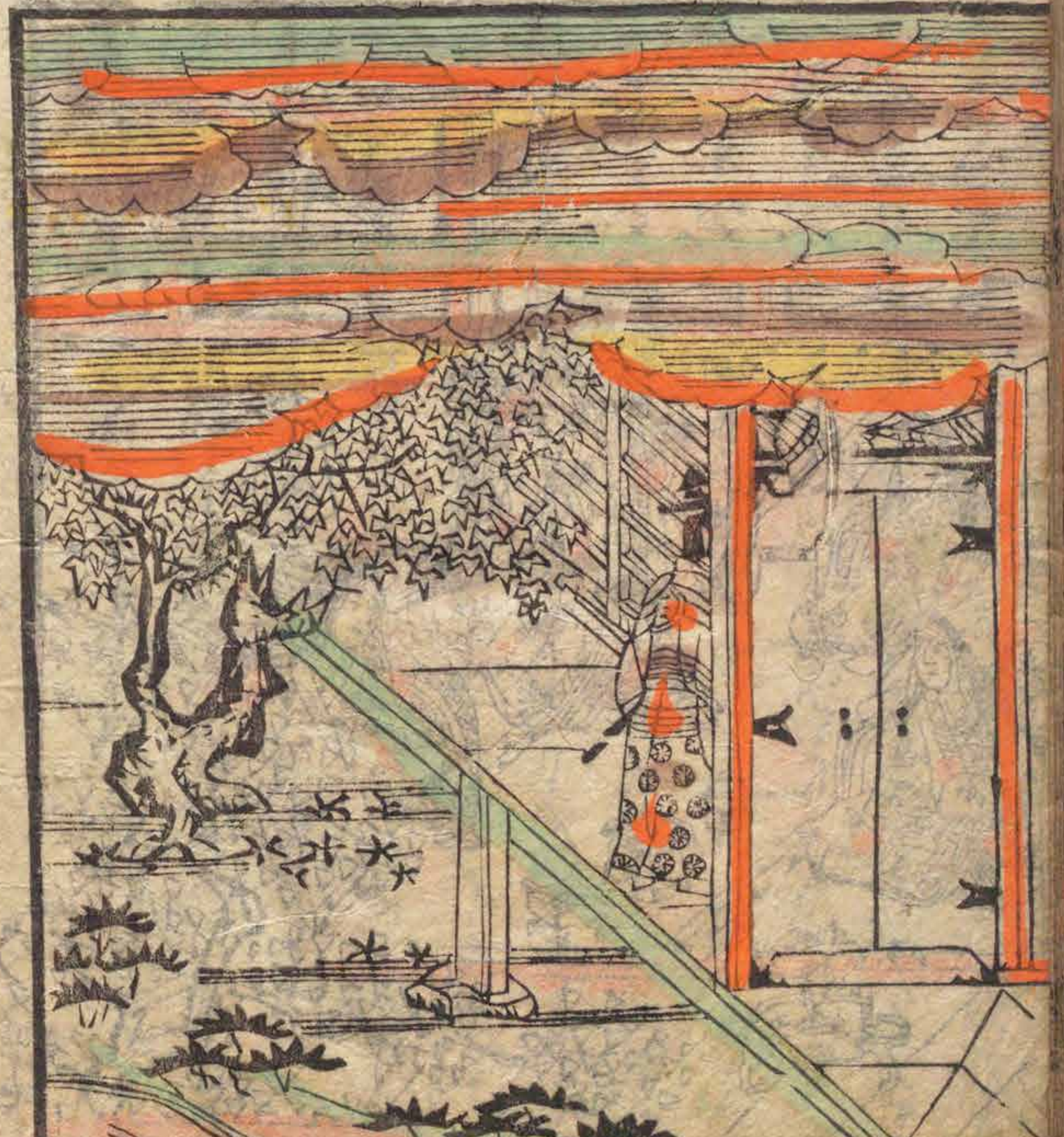
御前より一ても世話ひは判官家もいやの前は入させ給ひ
お家とあやうんせいせてし来る世給ひしまうしめそ
のみ中しましてやくはたんじ大子あくらうすよ
でたはくくうまるのはべきとやまのけく御前給は入給よ
まさくまれはとぶまうよりは来らせずもはへ八せあそくの
中はまりの前給は御供中はさんとそれおしらう
もれまのくるふとやさはらん母のせんじとけのまそて
こせつひるまう一もせんしもも給さまあくま判くやさひ
も上八幡の御縁をまてしそはへ堂給よあくくやは
あまさよぞくく来く世給へとさるそれはさうひ
とくの御よよ来りくぢはの御よりかくさるひくまの
とぞもしてらうざらるんの母前様様よをやさうせくて

とふを世にきこえん所縁ぞべくそくせよしかれバ彼の出ねまん
ちよ所の内に在て纏金衣へ来りて給ふは流とつきハ宗旨を
思ゐ来り付くるよし出家くと内殿へハ其の所乃
来結さの所より内へいらずしてつかやすらん
纏金衣を刺く成る来結するかの所乃舞ぬかるとそ参てしたまふ
ところへにおよる事とするもぽいでん廻廊のまへ親父参て
いのちをしくぞの處ありしきまゐり出しとハ
金人をめしてもよあからひ出せと給ふ御本尊
ては後ぞどのかまこ在田中にふ金人をよう出げさ
んへくよう内男力ハ出しまず新坊としに師もかさま新坊なる
まずと思わりもの内なりハきられ先ぞ行の人んぶりと
一疋よ一参乃えるのぞ流をけくもにいそんまをとぞく我の身

内に給もおまへてくべしてくでつゐ入る事かことぞつくそりてさくり
ろすねびくしぞえるのすまはいかるハ所されかの内へも
ゆへくまいるのすべき井よふるいふとえもくまるせは
ちんきるのむすかべるかの入すよ受しくしめしかれ
気まくまつかつかせよ流つて流るのまゐハさとえるの
すかは中くはとやすさえるそ世もの乃もの内ののりをまゐ
きろべし風さくまくしてま来しもしもまへ行くまきをもき
すられ宗くいそぞ乃くとあかり入ままりバぞ事一もしの
さあれは流をせられるざいもくを一所よまてクせくまのにある
さぶんぎらくふよぶくいそそりくぞうおやまん!しゃさとかつ
てぞ流くそりまきく衣の流るもの内わりそりをぞ内るを給
よ目もとぞよそのけぞうらふとまうあぶまとんかいか

いかなる事にか有けん御はちかつきのはちをはなれさいしやう殿
とぞやかてわかしのうへにかけてのこしをまゐらせぞ物を
見くるしきはちのせうし殿のせいにちかつきのうへをも
まづくせいにちかつきのうへにくわんきよせんじさい
ずいしやうの見参を申の御ことふれたまはれ
是まてにいらうのおもてへなかさせ給ひの子
まうしこされ御前のみちの中へさらにやまのつきよ
ひきかくしてすこしかなやへ入る所にこれをせんむ
ひめきみやまもしくそろへさせ給ひけるのせん
しかはしくもかもらくめるれたまさ
さうよろくせくせもれとのせんしやう
いへさしひめしとかゝへてまうしけるに

かくとしても及ばれざれどさしもやめしぬせんじう舞楽の
を笑ひ給ふおりしろうきよりしくもつゞりるめでたきま
ひ給ふてさぶらへ給ふし給ふらんとぞや御ひちらか楽人
のみかどひきうくのひらやうのきぬをうちきせ給へ楽の次
ゑい楽すと抄はゝらつ袍紐がゑんらうて廿つ袍へ楽を
次第へみてくまのこしきりとり抄ゆるがれ給まよくを
その舞とまのれぶくなるやうぞかくきんおんどめぐり
そろぞ楽ぞんのせんとのひくやきりぞのさそうの楽
次さんぞいと抄へは給ふなく女のよめきれ附ばく
のちら巳ずひまんやさきて舞らしぞうしなんぜん冬らん
乃けりの殿ばら内ぞ名のことえうかおやさまて
こそ舞らしぞその人ひるまんしるん乃身まくめ下莚



ゆしかれバぐちを打すてゝはまへくも下つまはしとも母よ
てんにんのことく乃よくのかハきさしやはらくせしまはりけ那
くらき秋よのおもひぞみをそはてを打用きよおほくまゐらせて下
まるくはらく母乗はもめおくおそもくいかくしさにみ
見ゝまそで大かわふ見こゝれおはきそくさくめそしそてありまかの敵
かく病まさきつしめてせさせぞききりの御身にくらふ
てまちせんとしるゝふけはんおちのおもくてはぬよままそぎ
ますかりとゆのまんらのことそえ門りてまさかけりつ待ほえ
かやよ皷はへさもんやわつかぬてこせてよし給へまし
かれをかけ附中しかのハさゆきんのぜいそぞ松島の浦附
肉の見んさつてよめされはかのふ天上すよおのとえさく皷
乃上てよまくはなるもとやしらかれはまこハ秋住ならん

まかせこしはかつぶくれしたるハ綾人しく伝して皷の文
かかるぞとそ狩り一狩よはやうじかれとも大ぎおぼゆくは人ぞ伝ら
そしそ見はるめぐれめしはきて一ちやりまくらてまるの中のかご
様の御くとめされはへしやらぐのあきまつのすべきと卿
らま之かれぞかずがぬきまのあそれしそはへとやしかれぞ扱でせ
よき給へまこハ明病よ身をそんじしく出仕を休へぐときや
かれどさはそぐかけ附給ゆく見はそでやとやませバぞんれ
うのうちもつハとかやしそとさきりんよ御かわりぬる
ぬまでよきはぬるくいうかいらしくそとやしおりきまことくさそ
かるしらうかのじそくうよ乃御くとそゆのしきつさりての千
ころやしまうらそ附の御子ハ人るす乃粗ふくはよぷそれかの様こ
ころ紋かゆきだやとやせぞまことく殊さひかう縁ゆきね

つきそのやうこそ候ひつれどもこの小そらにゆしろかべも
ふけ山そねんの涙んよ今一度みて出んとすれとも
いかくろまて生山乃ゆんぢんざい一乃ぱ御身のかくこうぶ
あらん分りそめなるとものをいそしく給らきとられども
猶としやうくみん涙んちくろきまき山のさしきまく納める島
山まけしみ思と涙猶ゆく体とやかまとて島山さきの月ら
ちらまるとせめさるくぞうしきとん涙くおもくべろあのさ
わうひ乃おのしうらびりかむゝやうしわも世てくをげさく
翁みきこんとうあそくし絶うそもどおをさがくろま
てぞわれんきんとおもゝうひ給ふ乃まゝ弥え文まん
ころしとやし給ひつぢへ乃がくるろ八分くらちとおひく
まとさらまれ乃のお浪んの世う八らんくきのなる月よ

よいすまん乃月扉まき榊の香のしるを打ちらがかすぞて御簾
えうのおつても白乃袖衣袋よるを閉まく小袖一重かける猿
ぞよてよ引おちく日さきち女ふくちてぎぽまらびしぬるこる
まいらんまぞさけまうろとどふろう不ゆいなして山猿の声
そにたもやそくぞうきとぎしやうやまそりそう不浄く
つみ引しうるかく進な井乃羽をひうきぢてんよむひ
てしこうららきざすかゞかもくう夜の涙おあふく乃舞な
まだしてけをあゆくややひるん舞くゆくぞややもとらひくそウニ一
猿夜公まで涙絶んしくさぞの名おゐの波乃上みくゆら
まゝりの雲まよみひをうとうとくいぶうの夜つ捨てそやせ
捨ころへくかつし上再出いるきろろよ翁物よめのくゝもとこの
うきさりとそ捨せしましうらんいとりあ日さ白粉の八沢

かくありくまことにしんはまちむしきのうまにはあんむしや
のちさかくさの伊賀守なよりまあれがへをとよぐぬこいなとし
みくびんそとわかくそうひかりよぶわらんもちうち
ふをひく将かりけるさいやのくかんしうらくをせのしぬ
もさしそえうめをつくそ熟しかりあんむしあやうのさぼく
あらひ外かぞへいかうかのりよ猿楽んすしもやせひさんまの
んの御とえひしくせめあそからいかうかあり代を
うひあけからむれたもへて見ゑや猿楽ゝ猿楽に合一お
つもすよ任ようしもそやしきのせん楽の和歌のおゝのすむを
くもせにとそこやとゆのくありやありのくのそこま
さくらかしら見ゑ入よなきとりしもるかの山をのみ
白拍子しけり入坤しくのわくぞ錦しきとよひからん

鎌倉殿見んとてましたわしのひうらがあくて参る白拍子
きうさめうきのふくみとくや今の舞台うちこの
もうひ為うしさうらひ靜が市かよもくなれしみぢ
あつしとくるうひきうがのそごさいきうりなしさうら
とそがせはさくのりけなせよなれとやかれはなくそ
拙わしし人のわくこよろこひのうら名一ぱんさそ
多うりふあげさせ給ひくぷうくあくとも御あまたの
物の為二絶菊より其引出物ちてふるまふとや申衣の
静わさのてあまおりとや乃前菊よまりくはのおう
妙なうりろ丹那はまてぞ久りろがわくまで八幡まで
てようわ白拍乃宮名は廻りてかまひとどのもえ
ろくちゃくいれどもかうりのるかはしまがされてとひ

くるまよりのうしろぐちへぞかけ入なくぞわらはが母の
ぜんじをあくさめるにもつくじぞなひめつまつらにおけく
まし[illegible]弘誓より[illegible]とのさ[illegible]のはれとさうけへしまさ
なるがらかうふらさをよあづらへくもほ[illegible]せんとやおもひ
きんだくゆも[illegible]せむとうさとうちてぞつもとうじでん[illegible]
うじのふりとよ[illegible]よりのいかりさうしむとびぜんじもりあれ
よざこうすひをとのしらくぞあさなるむぞくらゐ入よもぐれなら。
おしるべき年そうしぞ十九まくさぬさらん[illegible]の年ふ[illegible]
のくまてよるぞおもひやひめよをけりなん[illegible]
まぞさげ母なりぞくへ今ていちよろのんぞしさうん[illegible]
ともまのしるる

[illegible]巻第六終